

---

# 魔王はドM！？

レイン氷花

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

魔王はDM！？

### 【Nコード】

N5241D

### 【作者名】

レイン氷花

### 【あらすじ】

高校一年の春に両親を亡くした不幸な少年五膳麗二は、ある日魔王と結婚することに！？そして彼の真の不幸？は始まる！！

不幸その一 始まりは彼女に会った事。(前書き)

自信作ですので読んでくださいな

レイン氷花

不幸その一 始まりは彼女に会った事。

新しい生活に胸をドキドキさせる春、そして誰だって何かとウキウキする春に、マジでウザイ奴が現れた。しかも俺の目の前に。

~~~~~

早朝。

まだ誰も起きてはいない時間に俺は起こされた。

「起きなさい！麗二！今何時だと思ってるの！」

お袋が大声で怒鳴っている。

「はいよー！」

俺は渋々起きるとする。お袋が起こした時点で二度も寝れない事は分かっていたからだ。

一階に降り、親父に挨拶する。

「おう、親父！朝から早いな。」

という、俺にしては高いテンションで挨拶し、親父は読んでいた新聞を少し下にずらし、挨拶を返す。

「相変わらず遅いな、麗二。」

俺はテーブルの上の新聞を取り、我に帰った。

「どうした？麗二。」

親父が心配そうに顔を覗く。

「誰だお前は。」

「何を言ってるんだ麗二、私はお前の親父だろうが。」

親父と自称するソレは笑った。

「五月蠅い黙れえ！！俺に親なんか居ねえ！！俺の両親は2週間も前に交通事故で！！俺の目の前でお袋と親父はぐちゃぐちゃに潰れて死んだんだよおお！！！！！！」

俺はテーブルにあった灰皿をソレに投げ付けた。

ガンッ！

灰皿が壁に当たる音がし、灰皿が落ちる音だけがこの家に響いた。

「あ…？」

その音を聞いて俺は正気になった。

「…また…か？くそっ！」

お袋と親父が死んでから三日経った頃、この幻覚は現れた。何度も何度も、俺を追い込む様に、俺を狂わせる様に…。

そこまで考えて俺はやつと気付いた。

「今何時だ？」

時計を見て、俺は凍り付く。

「やばい！早く学校に…、て、違っただろ？今日は春休みだが。」

俺は完全に気が抜け、椅子にもたれ、天井を見る。

「…こんな家に一日中居たくはねえな。」

思わず俺は呟いていた。そして俺は椅子から立ち上がり、自分の部屋に行つて着替えて家を出た。

ここまでで五分もかかってねえなあ。

「ま、いつか。」

と、俺は割り切り、家を後にした。

しばらく歩くと、足音が背後から聞こえて来た。

ペタペタペタ。

裸足か？て事はホームレスか？

ペタペタペタペタ。

足音はまだまだ続いている。

俺の後ろを付いて来て何の用だ。一体。

ペタペタペタペタ。

…撒くか。

俺の足は通常よりも早くなっていく。

ペタッペタッペタ！

コイツも歩を速めたか。どうする？このまま速くしていくか？

「ま、待つてくださいいい！！」

ん？話しかけてきた？しかも幼い少女の声か？俺は完全に足を止めた。そして、後ろにいた少女（多分）が止まり切らずに俺に激突した。

「あふえ！？」

うん、間違いない。コイツは女だ。しかも中二くらいの。何故そう言い切れるって？振り向いてまじまじと見たからに決まってんだろ？

「き、急に止まらないうでくださいよー！」

鼻を押さえ、涙目で怒る。

かなり萌え、じゃない！何言ってるんだ僕は？とにかく、少女はかなり可愛かった。

そんな事を、彼女の本性を知るまで思ってた。

「で、何の用だ？ストーカー。」

俺は未だに鼻を押さえている少女に言った。

「ストーカーって酷い言い草！！」

「じゃあ、何なんだ？」

「愛の狩人。」

「よし、交番行こう！」

「まっ、待つて待つてお願い！お願いしますからあ！！」

その少女はかなり必死に止めてきた。

まあ、俺もその必死な姿を見て可哀相に思い、思いとどまった。

「あ、ありがとうございます！」

少女は嬉しそうに飛び跳ねた。

「で、結局の所お前は何で俺の後を付いてきたんだ？」

俺の質問に、今まで飛び跳ねていた少女は突然跳ねるのを辞めて、真剣な顔を作り、顔を近付けた（背伸びしただけ）。

「それはですね。」

少女の気迫に押され、俺は唾を飲む。

「それはあなたが、魔王のお相手に選ばれたからなんです。」

その言葉に、目が点になる俺。

「あー、疑ってますね、その目は。」

ハイ、バリバリに疑ってます。

「では証拠を見せます。」

と言って、少女はポケットから紅い指輪を取り出し、俺の指にハメた。

「いいですか？腰を抜かさないでね？」

そう言っつて、少女は消えた。

「え？何だ？ここはどこだ？どうして？」

俺が混乱するのも当然だ。何故なら俺は、地下の暗い広場にいた。

「なんだ？どうして？こんな事に？」

俺は今まで公園にいたよな？なのになんだここは？まるで拷問部屋だな。

「遅かったな。」

突然後ろから声が聞こえた。そしてその声は、明らかに女性の声だった。

「ふむ、近くで見てもかなり良いじゃないか。」

振り向いて、まじまじとその声の主を見た。

「あんたは…？」

そこにいたのは、紛れもなく美少女と呼ばれる様な少女がいた。少しつり上がった隻眼の紅い眼、小さいお鼻に柔らかそうな唇。そして光を反射する長い美しい銀髪。

胸にストライクした。

「こっちに来い。私の夫になる人間よ。」

俺は我に帰り、近付いていく。

「そうだ。そのままこちらに来い。」

俺は、彼女の言う通りに近付いて行くが、一つ忘れていた事に気付く。

「よし、その顔をもつと良く見さしてくれ。」

俺は彼女の前まで来た。そして俺は彼女に顔を近付ける。

「結婚しよう。」

彼女はそう言い、唇を近付ける。

チョットマテ。アイテハダレダトオモツテイル？マオウダゾ。魔王。

だが、そんな俺の思考はどうでも良くなっていた。ただ、彼女とキスが出来れば良いと、本気でそう思っていた。

「ここに誓う。私、ロメア・クロルタリアは、永久なる繋りを約束する。」

彼女は小言でそう呟くと、唇を重ねる。最初は触れるだけが、次第にエスカレートしていき、お互いの舌を絡み合わせ始めた。さらに麗二と彼女は互いに腕でお互いの体を抱き、離さない様にロックする。

「っ、はあっ…っ…。」

彼女は息継ぎの為に口を離した。彼女の目は、熱に浮かされたかの様に焦点が定まらず、頬は紅く、口元からは唾液がだらしなく垂れている。

呼吸を整えて、彼女は言った。

「…あなたと私は、これで正式に婚約者という仲、です。」

「そう、だなっ。」

彼女はニツコリ笑うと、とんでもない事実を語る。

「これで正式に、あなたが次期魔王です。」

「はい？」

「だからあ、あなたは事実上魔王なんですよ？」

「嘘だあああ！！！！！！！！」

この時の麗二には、まだ分からなかった。

この戦いがまだ始まってもない事に。

「宜しくね ダーリン？」

「キャラ変わり過ぎだーーーー！！！！！！」

麗二の不幸は始まったが。

不幸その一 始まりは彼女に会った事。(後書き)

読んでくださったみなさまありがとうございます。

不幸その二 彼女はガラスのハート。(前書き)

面白いかわかりませんが宜しくお願いします。

## 不幸その二 彼女はガラスのハート。

「で、どういう事なのか詳しく説明して貰おうか?」

「だからあ、何度も言っているじゃないですかあ あなたは魔王と結婚することになったんですよ?」

「だからそうじゃなくて、何で俺が魔王と結婚することになったんだ?」

俺は桃色の髪をした少女に真相を聞いた。

「何故って、魔王があなたに一目惚れしたからに決まってんじゃないんですかあ」

「どうして!? こんな取り柄も無い、どこにでもいそつな普通の人間の俺に惚れた訳?」

自分で言ってて悲しくなりました。マジで。

「それはですね…。」

この質問に少女は初めて答えに迷った。

「え〜とですね。これを聞いて魔王と結婚しないって事は出来ませんからね?」

何か聞かない方が良いよな？これ。

「魔王はいつもあなたの生活を覗いていました。」

「はぁ！？」

「…特にあなたの入浴の時を…」

その言葉に俺は凍り付いた。

「え、いつから？」

「…三年前から。」

俺はテーブルを叩き、その少女をかなり怒気を含んだ目で見る。

「まっ、魔王は恥ずかしがり屋なので。」

「どんだけ！？」

「とにかく落ち着いてください！話が進みませんから！！」

俺は渋々座り直す。

「この話は置いて、まずその紅い指輪を説明します。」

少女は、指輪を指差しながら説明を始めた。腕疲れねえ？

「その指輪は王室の鍵といえます。その指輪をはめると自動的に魔王の寝室に移動します。」

なるほど、だから景色が変わったのか。

「魔王の寝室には、普通は魔王以外誰も入れません。ですが、その指輪は、魔王の寝室に行ける唯一無二の鍵で、これはとても高価な物です。」

ふーん、あそこは寝室かあ、そついや、良い匂いが充満してたな。

「変態。」

「スイマセン。じゃなくてえ！！何で俺の考えてる事が分かったあ！？」

「口に出してました。」

あ、そうすか、失礼しました。

「とにかくその指輪は無くさない様にしてください。」

「うす。」

「では次に私の自己紹介をします。」

そついや名前聞いて無かったな。

「私はメア・クロルです。これから宜しくお願いします。」

メア・クロル？なんか魔王の名前に似ているな。てか待て、これから宜しく願いますって？

「おい、宜しく願いしますってどうゆう事？」

「何故って？私はこれからあなたと一緒に住むんですよ？」

「は？いやいやいや、どうして？」

「住むところが無いですから。」

「何でお前を住まわさんといかん。」

「何故って、私は魔王ですから。」

はい？

「正確に言うと、この世界の魔王の体です。」

「どゆ事？」

「細けー事気にすんな。」

「いやいや、気になるだろが、それ。」

「後から分かれ、そして早く寝かせろ。」

えゝ？何こいつ、性格変わり過ぎたろうが。

「あのゝ、メアさん？性格変わってますよ？」

「気にするな、こっちが地だ。」

えゝ！？何かショック！！

「部屋はお前と一緒に良い。」

「いや、空いている部屋があるからそこ使って良いぞ？」

「別に私はお前と一緒に良いと言っておるのだ。」

何か魔王より偉そうだな。

「いや、遠慮しなくても良いってば、好きに使って良いって。」

「だから私は、うぐっ、ぐすっ、ひくっ。」

何故突然泣く！？

「わ、私はっ、ひぐ、ぐすっ、お前と同じ部屋で、ずっと、良いって、うぐう。」

「分かった分かった、何か知らんけど一緒に部屋の良いんだな！？」

メアは泣きながら頭を上下に振る。

扱いにくいなコイツ。

時計を見てみると、…10時だった。

飯食ってないけどあんま腹減ってないからいいか。

「お前は腹減ったか？」

「ずず、減ってない…。」

よし、風呂入って寝るか。

「風呂沸かすから先に入れ。」

一応今日から一緒に住むからな。

「え、私はお前と一緒に入りたい。」

「え!?!」

「うぐう…」

「分かった、分かったから一緒に入るよ!」

コイツ口悪いくせに脆いよ、ガラスのハートだよ。割れ物注意だよ。

「ありがとう…。」

俺はお湯を沸かし、指輪をポケットから取り出して指にはめた。

「ダーリン」

「ぐほっ!?!」

寝室に着いた瞬間背中から抱き付かれた。

「そろそろ来る頃だと思ってたんだあ」

「ぐっ、良いから放せ！」

「嫌だあ」

「そりゃっ！」

「え！？」

背中に張り付いていた魔王を背負い投げした。

「ぐぶっ」

モロに背中から落ちて床にうずくまったよ魔王。しかも声が嬉しそうだったのは無視しよう。

「で、聞きたい事があるんだが？」

「任せて！メアの事についてでしょ？」

「察しがいいな。」

てかもう回復したのか？

「メアはね、口は悪いけど淋しがり屋で怖がりで無邪気で甘えん坊でガラスのハートなんだよ？」

「……………面倒くさ。」

「そんな事言わないで、ね？」

「ハイハイ分かりましたよ。」

まったく、面倒くさいやつが来たな。

「後頼みたい事があるんだけど。」

「何？」

魔王が上目遣いに言う。

「毎日ここに来てね？」

「分かった。」

「約束ね？」

「ハイハイ分かりましたよ。」

「ハイは一回」

「はいよう！」

約束を交わすと、俺は家に戻った。

…約束、か。



不幸その二 彼女はガラスのハート。(後書き)

読んでくださったみなさまありがとうございます!!

不幸その三 彼女は男を知りません。（前書き）

今回は少ししか不幸要素がないです。代わりにちょっとえっちに偏り過ぎました。

不幸その三 彼女は男を知りません。

五膳麗二宅

10時32分。

「お風呂 お風呂」

と連呼しながら、メアは飛び跳ねている。

元気過ぎ。しかも一緒に風呂入ろうとかゆうし、本当疲れる。

「お湯沸いたぞ。」

「わーい！」

ドドドドドドドドドド！

「廊下を走るな。」

「はい」

さて、どうするかな……。

「麗二？」

メアが心配そうに見上げている。

「じゃ、じゃあ早く服脱げ！俺は着替え持って来るから。」

そう言つて、その場を脱出した。

服を取つて戻つてみると、メアはまだ服を脱いでなくて、そのままそこに立っていた。

「風呂入らないのか？」

当然そう聞くよな、誰だつて。

するとメアは俯き、何かを呟いたが、小さ過ぎて聞こえない。

「何だつて？」

「…服の脱ぎ方が分からない。」

はい？

「服の脱ぎ方が分からないから入れないの！」

えーと、この子馬鹿だろ。

「だから。」

？

「脱がして」

笑顔で何危ない言葉吐いてるんだコイツ。それに今の発言は殆どの男達が獣になりかねないような攻撃だぞ。

「お願い。お願い。おね、ううぐっ、ひっく」

「分かった分かった分かった！だから泣くなよ！こつゆつの苦手なんだから！」

泣かれたらこちらの負けは決定だな。

「で？本当に俺が脱がしても良いんだな。」

そして本当にこいつは脱ぎ方が分かんないのか？一応あいつに聞こう。

俺はまたポケットから指輪を取り出し、指にはめる。

「あらら？また何か用なの？」

魔王はベッドに寝そべって雑誌読んで菓子食ってた。

「メアは相変わらず何かしたのかな？かな？」

「お前は相変わらず魔王のイメージを根本からぶっ壊してるな。後ひ〇〇〇の〇〇頃のキャラの口調真似んな。」

「別に良いじゃないケチー。」

「ケチじゃない。この世界の安否に関わるんだぞ?」

「そんなの関係ねえ!そんなの関係ねえ!」

「五月蠅い黙れ。」

「はいすいません。」

魔王が大人しくなった所で本題に入るか。

「メアって服の脱ぎ方分かんないのか?」

「うん、分かんない。」

「分かってるんだったら教えるよ。」

「いや、それがね?教えたんだけどね。」

「一応教えはしたのか。」

「うん、でも全然覚えてくれなくてね。」

「そこまで馬鹿なのか?」

「ぶっちゃけるとね、もつと馬鹿。」

「…」

「…」

「…」

「…」

「…」

「…」

「…とにかく、俺が脱がしても良いんだな？」

「そゆ事。」

「…じゃあ、俺戻るよ。」

「…うん、がっばってきてね。」

そして、家に戻った。

「遅いよー！」

そう叫ぶと、メアは抱き付いて来た。

「ああ、分かった。うん、脱がすから脱衣所行こうな。」

そして俺は脱衣所につき、メアの服を脱がそうとする。

「早く 早く」

メアは、やっと風呂に入れるのがかなり嬉しいらしく、はしゃい

でいる。

「ジツとしてろ。」

俺はというと、かなり動揺しています。

何故って？分かれ。

仮にもまだ思春期の俺にとって、女の子の服を脱がすという行為は、よからぬ妄想を作り出し、さらに心拍数が増え、鼻息が荒くなり、今にも襲いそうになってしまう。

「お風呂 お風呂」

メアは俺の様子に気付いてはいない。

よし、脱がしにかかるぞ！！

思っんだが、この格好って…、なんとなく制服に似てないか？

長袖のシャツに、黒い膝まであるスカート。その上にマントと言  
うか、ローブみたいな物を羽織っている。

…取り敢えず俺はローブみたいのを取る。

まんま制服じゃん。

と呟く程、その服は制服に似ていた。

よ、よし次はシャ、シャツだな！

シャツのボタンを取れる様に、メアを回転させる。

そして上から順にボタンを取って行き、シャツの両襟を反対に開いた。

「っ！？」

声になりませんでした。

シャツを開くと見たのは、予想よりも大きい桃がありました。

「下着着けて無いのか！？」

「だって苦しいもん。」

無邪気に答えるメアは、ウキウキしてました。

「…。」

気を取り直して、スカートを脱がす。

カチャカチャ、ジーー。

一瞬覚悟した。なんせまたつけている物が無いかも知れないのだから。だが、予想は外れて、薄い水色のちよつと透けているパンツがあった。

そして、次はパンツを脱が、て待てや。いくらなんでもパンツは脱げるだろ？

「早く 早く」

「おい、パンツは自分で脱げ。」

これ以上は息子共々耐えられませんから。

「えゝ？パンツも脱がしてよ！」

「いや、それは自分で脱げ！」

「脱げないもん！」

「嘔吐け！」

「ふえ、ひぐ、うう」

「分かった分かりましたやらせて下さい！」

俺はまたポケットから指輪を取り出し、指にはめる。

「おっはゝ 今日三回目だね？」

「おい！メアはパンツも脱げないのか！？」

「うんそつだよ？パンツだけじゃなくて靴下も脱げないよ？」

「それ大丈夫か？」

「軽くやばい」

「むちゃくちゃやべーだろが!!!」

俺は持っていたフォーク（何故持っている？）を、魔王に向かって投げた。

サクサクサクッ！

放たれた三本のフォークは、魔王のアホ毛を仕留めた。

「うわゝ！私のチャームポイントがゝ!!!」

魔王の悲鳴を無視し、家に戻った。

~~~~~

「よし、やるぞー！」

俺はメアのパンティに指をかけた。

「早くう。」

そして俺は、パンティを一気に降ろし、この世の天国を見たよ。  
そして、この世にもう未練は無いよ。いつでもあの世に行ける

まあ、これで終われないけどね。

メアを風呂に入れ、俺も服を脱ぎ始める。

「早くう」

さつきとは正反対のテンションだな。

そう思いながらも、服を脱ぎ終えて浴室に入る、そしてそこには馬鹿がいた。

「…何やってるんだ？メア。」

メアは、ふろおけで溺れてました。

「たっ、助けて！あぶっ、た助け、て！」

俺は風呂で溺れてる奴を初めて見た。

「やれやれ。」

俺は仕方無く、メアを両手で抱え上げて助けた。

「あ、ありがとうございます。危うく風呂で溺れる所でした。」

何故溺れる？俺の一生の疑問になるな、コレ。

「てゆうか初めは体洗ってからふろおけに入るんだぞ？」

「だって体洗えないんだもん。」

…またこれか。

「…よし、頭貸せ。洗ってやるから。」

そして俺はメアの体まで洗う事になった。

「ふむふむ、こつやって背中中は洗うのか。」

熱心に覚えようとしてるけどさ、どうせ覚えなйдろ…？

「よしっ！背中終わりい！後は、…前か…。」

これはどうしてもやっちゃいけないだろ？なあ？皆さん。

「どうしたの？次は前だよお。」

メアはイスの上を一回転し、俺と向かい合った。

「早くしろお」

はあ、できるだけ見ない様にするか。

「くすぐつたいぞお」

俺、イマムネヲアラツテマス。

「むう、少し痛いよお？」

「スマナイ。」

「何故に片言!？」

「ツギハシタノホウヲアライマス。」

「また！？しかも無視！？」

ソナナコンナデ、ごほん！えー、そんなこんなでメアを洗い終え、自分を洗おうとしたところ、メアが自分が洗うなんて言ってきやがったが当然無視して普通に終わらした。そしてやっとふるおけで休めると思った所、家のふるおけは意外と狭く、一人しか入れなかったため、風呂を出ようとしたらメアが溺れてと、そんなこんなで今の状態になりました。

「うーん、気持ち良い」

「だなあ。」

「うりゃっ！」

「ぶっ！？」

「きゃははははは！」

「てめえ、水かけるな！」

「きゃははははは！」

「うるせえ！そして暴れるな！ふるおけは狭いんだから静かにしろ！」

「はい」

皆さんお気付きでしょうか？俺とメアはこの狭いふろおけに密着して入っています。

「わーい！」

バシャバシャ！

「狭いんだから静かにしれえー！」

ちなみに、どんな姿勢かと言うと、俺は普通にあぐらを掻いて座っている。そして、メアは俺の上に向かい合って跨がっています。ですから、メアの女の子の部分がかなり密着しています。そして、メアが動いてしまうと俺の息子の自己出張を見えちゃう訳でして。

「ハグハグッ！」

「おい！？どこを噛んでやがるー！」

「え？乳首だけど？」

「何故噛む！？」

「だって麗二に元気出してもらいたかったから。」

「いやいや！？だからって何故乳首噛む！？」

「魔王は元気になったよ！」

「いや、元気になったけどちょっと違うだろ！？」

俺の息子が、ね。

「もう、どっちなの！？元気になった…、？」

メアは、後ろを振り向く。そこには、我が愚息が戦闘準備に入っているのが見えた。

「……………」

俺絶句。

それに対し、メアの反応は意外な物だった。

「何コレ？この硬い棒？」

…え？それを知らないのか？

「何だろコレ。さっきは萎んでたのに変なの」

メアは、不思議そうに指でつつ突き、今度は握った。

「はっ！？」

「え？」

メアは、不思議そうに俺を見つめる。

「な、なんだ？」

俺は精一杯平静を装う。我ながら苦しいと思う。

「…。」

おもむろに、メアはまた俺の愚息を強く握った。

「うつー!!」

メアは俺の反応を確かめてる。で、俺は顔を逸らしてる。

ニタア

「せいやあ!!」

メアは愚息を掴んだまま、先端を擦った。

「うぐう!?!」

それに俺は耐えられず、声を上げてしまっていた。

「なあーんだ。麗二はこうすると元気になるんだね」

「おい! 元気になるの意味が違っただろうが!!」

俺が叫んだ瞬間に、メアはまた俺の先端を擦った。しかもさっきより強く。

「うあっ!!!!」

「よーし! 元気になったね麗二。この調子でもっと元気になろうね

麗二」

「お、おい…。」

「そおりや！」

「うわああ！！！！」

そんなふうには、メアの無知が分かった俺でした。

俺はあの後、風呂を出るまで耐え抜きました。まさに死闘とも言える戦いを。そして風呂から上がり、メアと自分の体を拭いて齒を磨き、メアに俺のお古を着せて、一緒に寝た。

消えかけの意識の中、一つ分かった事があります。

それは、メアにはちゃんといろんな事を教えないと（特に男について）、この恐ろしい悲劇が生まれるって事が分かりました。

多分これは俺の心に永久に残るだろうな。と、遊ばれた息子を労りながら、五膳麗二は眠りについたとさ。

めでたし。めでたし。

おまけ

麗二はトラウマが一つ増えた。

麗二は大人の階段を三段くらい上がった。

麗二はこの世の真理を見た。（メアの体）

麗二の息子は元気になった。

タラッタッタターン！

麗二はレベル2になった。

不幸レベルが50上がった。

魔王の愛が強くなった。

メアの扱いが少し分かった。

麗二の心が良くなった。

幻覚が弱くなった。

作者に不満が積もった。

作者に対して殺意が湧いた。

神（作者）の罰が下った。

次回の出番が減った。

悲しみが込み上げた。

またね  
〜

不幸その三 彼女は男を知りません。（後書き）

今回はどうでしたか？良ければ評価をしてくださいまし。では皆さん、また次回！

麗二「こんな小説に次回なんてあるのかよ？」

レイン「天罰。」

麗二「ぎゃあ！」

氷花「僕も」

ゴオオオオ！！！！

「熱っちいいいい！！！！」

レイン「…やり過ぎだよ。炭だよ。備長炭だよ。」

氷花「てへ 間違えちゃった」

レイン「…。」

メア「麗二！？どうしたの！？誰に殺られたの！？え！作者！？！」

氷花「この人が殺ったよ。」

レイン「ええ！？」

メア「麗二の敵い！！覚悟お！！！！」

バコドカメキピシパリンチュドーン！！！！！！

レイン「ぎゃああああ！！！！！！！！」

氷花「…（黙祷）。」

作者との語らい

おわり

またね

不幸その四 彼女の寝顔は破壊力抜群です。(前書き)

えーと、一応頑張りました。はい。

不幸その四 彼女の寝顔は破壊力抜群です。

五膳麗二宅

朝の七時。

「目覚ましドロップ！」

「ぐえ！？」

「ハッハッハ！やつと起きたか寝坊助太郎！！」

「ゴホッゴホッなんだそのマ○オにある様な技は、しかも寝坊助太郎って無理矢理漢字当てただけだろうが。」

「違うもん！ただくつつけただけじゃないもん！だって、だってひつぐうぐつ、ぐすつ」

「分かった分かった俺が悪かったから泣くな、朝から鬱陶しい！」

「ふえ……」

「ごめんごめん朝から言い過ぎた。」

抱き締め＋頭を撫でて泣きやむまで待つ。

「ずずう」

大分落ち着いて来たな。

「よしよし良い娘だ。」

頭を優しく撫でて、子守歌のように言った。

「…すう…すう…」

あれれ？

「メア？…寝てやがる…。」

メアの顔を覗き込むと、可愛い寝顔があった。

「つつか、子供か？お前は。」

半ば呆れつつも、そっとお姫様抱っこしてベッドに寝かせる。

この寝顔は見ていてかなり可愛い。

「童顔、小柄、そこそこある胸。」

萌え要素をかなり持つてるな。

「しかもこいつの寝顔は全てを癒すみたいだな。」

現に俺は癒されてる。

「…すう…すう…」

さて、朝食を作って来るか。

「もっと見ていたいけどな。」

俺はドアを静かに閉め、一階に降りる。

…えゝ次のニュースです。世界中で原因不明の突然死が流行っているとの事。そのー

ピッ

テーブルの上にあるリモコンを取って電源を消した。

「最近物騒だな。聞いてて鬱になるよ。」

リモコンを置き、エプロンを手に取る。

「そう言えば、魔王はいつもどんな物を食ってんのかな。」

ポケットから指輪を取り出し、指にはめる。

~~~~~

「よつと。」

着地成功、って誰か突っ込めよ。

（なんでやねん。）

テメエに頼んでねえよ。

（酷い！）

ウザいから黙れ。

「さて、と。魔王はどこだ？」

いつもなら声かけて来るのに。

「……う……う……」

寢息？しかも後ろから。

「寝てたのか。」

振り向くと、眠り姫がいた。

「……綺麗だ。」

な！？

そう呟いた口が、自分で信じられなかった。

「すう……すう……すう……」

そんな葛藤など関係無しに、眠り姫は寢息をたてている。

「てゆうか、まだ起きてなかったのか。邪魔したな。」

俺は指輪を取ろうとして、思いとどまった。

「……すう……すう……」

眠り姫はまだ寝息をたてている。

「だ、大丈夫だよな？」

何が！？てか俺は何考えてるんだ！？寝てる間にキスしようって  
どうして思った！？

「……すう……すう……」

俺が気付いた時には、自然と足が眠り姫に向かっていた。

「ま、まあ大丈夫だよな？」

（誰に言ってるんだ？）

読者にだよ、ボケ作者。

（酷えー！！）

さて、邪魔者がいなくなった所で始めるか。

眠り姫は薄い物を羽織っているだけで、中が透けて見える。

俺は息を殺し、眠り姫の顔を覗く。

「……すう……」

相変わらず眠っている眠り姫の頭を撫でてみた。

「…うん…」

！！

俺はすかさず指輪に手をかける。

「…う…すう……」

起きてないな。よし！

眠り姫の唇に自分の唇を重ねる。

それだけの行為に、心臓はかなり早く脈打ち始める。

お、落ち着け俺。まだ眠っているから大丈夫だ。

そう自分に言い聞かせても、逆に心臓は速くなっていく。

「…うん？」

「んあ。」

眠り姫は、かなり最悪のタイミングで起きてしまった。

やば。俺ヤバイよな？この状況。

魔王は一時停止している。勿論俺も。

そついやいつまでもキスしたままじゃ話出来ないよな。

唇を放そうとしたら、魔王の腕に止められた。そしてそのまま引き戻されて、キスを再開した。それもただのキスではなく、舌まで使ったディープキスだ。

予想外の展開に驚きつつも、こちらも舌を使って、相手の舌の動きに答え始める。

~~~~~

ディープキスを始めて十分くらい経った頃、さすがにもう限界の様で、魔王は口を離す。

「はあっ、はあはあ…」

魔王は息を整えようと、大きく深呼吸を何回かした後、俺を見た。その視線は、何かを咎めているような物ではなく、逆に愛しくて仕方が無いといった視線だ。

「言ってくれば、いつでも喜んでしてあげるのに。」

やっと口開いたと思ったたらそれか。てか寝ている間にキスしたのは責めないのね。

「気持ち良く寝てたんで起こすのが勿体なくてな。」

うそ八百だな俺。

「そうですか。では、寝てる間にキスしたからもう一度してくださいまし」

そう言うつと、また唇を重ね始めた。

ていうか、いつの間にやら俺が下になってるな。…逃げられん。ま！逃げる意味ないんだけどね

その後、俺は魔王とのキスを堪能してきた。

で、戻って来ると、いつの間にか起きていたメアに文句を言われた。

「ボケツとしてねえでさっさと作れや。」

お、何か久しぶりに見たな。こいつの地。

「大体、朝食も作らないで何してたんだよ。」

「すみませんね〜。」

「しかも出番少ないし。」

「それは作者に言え。」

「私何もしてないのに、ひっぐ」

「あー！今度作者に言うから、な！？」

「うう、ありがと。」

メアの頭を撫でてあやす。

「さて、朝食を作るぞ！」

「おー！」

こうして、俺は朝食を作り始めた。

おまけ

麗二は魔王に興味を持った。

メアの将来が不安になった。

魔王の寝顔を見た。

タラッタタターン！

麗二はレベル3になった。

麗二の不幸レベルが50上がった。

メアの扱いがまた少し分かった。

魔王の愛が強くなった。

作者は馬鹿だと思った。

作者は変態だと思った。

作者に対して不満が積もった。

神（作者）の罰が下った。

次回の不幸が凄まじくなった。

いじけた。

またね

不幸その四 彼女の寝顔は破壊力抜群です。（後書き）

今回のほうでしたか？

不満などがあれば、遠慮無く言ってくださいな。

麗二「おい、馬鹿作者。」

レイン「何だね？変態。」

麗二「今回はメアの出番が少ないが？」

レイン「気にするな、運命だ。」

麗二「何が運命だ。ただお前の力不足なだけだろうが。」

レイン「うるせえ！」

麗二「まあ、こんな馬鹿作者ですけど。これからも宜しくお願いします。」

作者との語らい

終わり

またね

不幸その五 彼女は幼児退行しました。(前書き)

今回も少ないですが、宜しくです。

## 不幸その五 彼女は幼児退行しました。

夕飯の買い出しに行く途中の道で、俺は厄介な物に出会ってしまった。

「アンタ誰？」

普通、初対面の人にはそう聞くよな？

「申し遅れました。私、ヘルガ・ドルスターです。」

「あー、ヘルガさんですね。何か俺にご用で？」

「ええ、私は雇われた殺し屋で、貴方を殺しに来ました。」

「はい？」

「人違いじゃありませんか？」

「人違いだろ。」

「いいえ、違いますよ？貴方であつてるはずですよ。」

「おいおい、マジか？」

「どうして俺は殺されんといかん？」

てゆうか、俺何か悪い事した？してねえよな？……多分。

「貴方は魔王に選ばれたからですよ。貴方も既に分かっているから、魔王との結婚を決めたんでしょう？」

「え？」

どゆ事よソレ？始めて聞いたぞ。

「あらら？聞いていなかったんですか？それはなんとも可哀相ですねえ。」

黒装束の男はなんか可哀相な物を見るような視線した。

「まあ、だからと言って殺さない訳にはいかないのよ。」

と言って、黒装束の男はなんか変な形の刀を取り出し、構える。

「御愁傷様。」

そして、男は刀を振り下ろした。

この時の俺は、全然別の事を考えていて、向かってくる刀は視野に無かった。

ブシュッ

辺りに撥ねる鮮血。

周りにいる通行人の驚愕の顔。

血がべつとり付いた刀。

ニュースの司会者。

男の恐怖に引きつった顔。

「なっ、えあ、…れ？」

「何呟いてるんだお前？」

頼むからそんな顔しないでくれ。笑えてくるだろ。

「おーい、生きてますか？」

反応無し。

「おーい。」

男は少し後ずさる。

「なんだ。意識あんのかよ。」

「…あなたは、人間か？」

「人間だよ正真正銘の。」

いきなり失礼な事ぬかすなよ。

「つーか、これで終わり？」

バキン

掴んでいる刀を折った。

「あーあ、刃の部分握ったから血が出てるじゃん。」

血が流れる右手を男に見せる。

「くっ、一時撤退ですね！」

男は俺に背を向けると、…逃げた。

「一時撤退って、またくのかよ。」

それは避けたいな、こんな痛い思いしたくないし。

俺は男の後を追いつめる。

「ちっ！」

男の妙に高い声が響く。

「待て待て」

なんか俺この状況楽しんでない？

「我が魂を裂きて、この地に恐怖を刻め！」

なんか聞こえる？。

「カマイタチ！！」

なんか、強い風が吹いたと思ったなら周りの物がバラバラにされていった。

「アラ不思議」

てゆうか俺ピンチ？

男は勝ち誇った様に笑ってやがった。∴足震えてるけど。

「よつと。」

何かを避けてる俺。

「ふえ？」

なんか呆然としてるな。おっ、危ない危ない。

「ほっ。」

男は俺をまじまじと見ている。

「おっと！」

男は声が出ない。

「ほい。」

男は口をポカンと開けている。

「よっ」

男は絶句した。

「ほいほい」

イナバ〇アー

男はなんか地面にのの字を書き始めた。

「下手な字だなお前。」

「うわぁ!?!」

後ろにコケる男。

「痛い……」

おーい、パンティ見えてるぞ? 痛がるのは隠してからにしろ!

「はえ!?!」

慌てて隠す男: え?

「て、ちょっと待てやぁ! お前まさか、女の子!?!」

頬を赤く染め、うなずく殺し屋。

「  
…」

「女だよな？」

「はい。」

「殺し屋？」

「はい。」

「怖がり？」

「……はい。」

「殺し屋向いて無くね？」

「はい。」

うなずいちゃったよこの娘。

「俺を殺すのは諦めろよ？」

次何人で来るか分かんねえし。

「いいえ！諦めませんよ！！」

むー、頑固な奴だな。この手は使いたくなかったんだが、こっちは命かかってるから仕方無いな。

「ちょっと耳貸せ。」

ボソボソ、ボソボソ…

「え…？あ、ふえ！？」

アラ不思議 眩い程に白かった肌がトマトみたいに赤くなって混乱し始めましたよ

「それでも諦めない？」

ちよろいな。

「あえ？ほえあ！」

あ、言葉話せなくなってる…。

「…どうしよ。」

「ひにゃ！ふにゃ！」

「…ほ、本当にどうしよよおかな！？」

「あにゃ！？へあ！」

…コレ、俺がこんなにしたんだよな。

「はにゃにゃ！…！」

確か、ヘルガ・ドルスターって言う名だったよな。

「ふにゃにゃん！」

……………。

~~~~~

五膳麗二宅。

6時34分。

「えゝ、という事で、今日からここで世話する事になった。元殺し屋のヘルガ・ドルスターちゃんです。」

「ふにゃん！」

「…」

何か反応示してよメアちゃん！

「か…」

「か？」

「可愛いー！……！……！」

「うお！？」

メアはヘルガさんにダッシュで抱き付いてきた。

「ふにゃん!？」

「ふにゃ」

「ひにゃっ？」

「へにゃん！」

「ふに！」

…何か会話成立してる。

「へにゃん？」

「ふにゃひにゃ。」

「ふにゃにゃ！」

…凄いな、メア。

「「ふにゃにゃ、ふにゃ、ふにゃ」」

会話成立どころか、歌歌い始めたな。

「「ふにゃにゃん」」

こうして、居候がまた一人増えた。

…面倒くせ。

おまけ

「ちょっと！私の出番がないじゃない！」

「気にしない気にしない。」

「もー！！私一応ヒロインなのに！！！」

…魔王は叫んでいた。

またね？

不幸その五 彼女は幼児退行しました。(後書き)

感想や氷花をおまちしております。

麗二「送る奴なんていないだろ。」

レイン「いるよ!」

麗二「はあ、こんな作者の元に生まれなかった。」

レイン「お前の出番無くしてやる!」

麗二「おう、やってみやがれへボ作者。」

レイン「スイマセン出来ません。はい。」

麗二「…こんな作者だが見てやってください。」

お終い

不幸その六 彼女は謎が多いです。(前書き)

今回の話はあまり面白くないです。間違いなく。

不幸その六 彼女は謎が多いです。

え、前回ヘルガさんを幼児退行させてしまいました麗二です。

「ふにゃにゃ！」

「ひにゃー！」

今心底後悔してます。

「「ふにゃにゃ」」

何故って？御答えしましょう。

「ちったあ静かにしろお前ら！」

「「ひにゃい」」

元気に返事をする二人。

拾って来てからずっとこの調子だ。仲が良いのは良いんだが、四六時中このテンションはかなりキツイ。

「あなたは私の奴隷 あなたは私の奴隷 だからあなたは私の」

バシィィン！！

「なに危ない催眠してんだ。ヘルこつち来い。」

「ふにゃあゝい?」

ヘルガが目を回しながら歩いて来る。

「酷いよ麗二!! 女性を殴っちゃいけないんだよ!？」

額を撫でながらメアは突っ込んで来た。

「□○○ト○○き!」

それを俺は横に受け流す

「ふぎゃ!」

メアはそのまま最高速度でテレビの画面にぶつかる。

「よしよし、ヘルはもう寝とけ。」

ヘルの頭を撫でて、眠るように促す。

「ふにゃい。」

「よしよし良い娘だ。」

俺はヘルを部屋に送り、ソファに戻った。

「ねえねえ。」

「なんだ？メア。」

てか復活早え〜。

「ヘルっていう、冥界の女王みたいな名前よく思い付いたね。」

「それは何か？遠回しに俺のセンスを疑ってんのか？」

「バリバリに。」

「おい、そこは否定するところじゃないのか？」

「別にどうでも良いだが。」

「おい、そこで地出して逃げるな。」

「逃げてるんじゃないよ。ただこんな無駄な話題で時間使いたくないんだよ。」

「おい、ちょっと来い？」

「いえ、遠慮しておきます。はい。」

「大丈夫だから来い。ただ一、二発殴るだけだから。」

「どこが！？どの辺が大丈夫なの！？」

「気にシナイ。」

「パクンな！」

「そんなの関係ねえ！そんなの関係ねえ！」

「あれ？麗二大丈夫？」

「明日の天気は○レ晴○カ○。」

「あの、麗二さん？」

「我が生涯一片の悔い無し！」

がくつ

「麗二！？大丈夫麗二！？」

「敵は本能寺にあり！」

「しっかりせえ！！」

ボコッ！

「あれ？麗二？返事してー。」

返事が無い。ただの屍のようだ。

~~~~~

【メア視点】

「どうする！？こんな時は誰か…。」

そうだ！魔王だ！

「ふにい。」

「え！？」

声がした方を向くと、ヘルちゃんがいた。

ここからは吹替えでお送りします。

「どうしたの？」

「おしっこ！」

「え！？」

私脱がし方分らないよお！どうしたら良いの！？

「おしっこ漏れちゃう！」

「ちょっと待ってね！お願い！」

やばい！

「起きてよ麗二！」

ドカボコメキピシ。

返事が無い。ただの変死体の様だ。

「こうなったら！」

ポケットから蒼い指輪を取り出し、自分の指にはめた。

~~~~~

### 【?視点】

ん？メアに変わったの？

メアの奴交替するならすると言えば良いのに。  
いつもいきなり変わるんだから全くもつ…。

「で、私は何すれば良いのかな？」

「ふにゃあ〜！」

背後から、可愛い声がした。

「あら？あなたは確か…」

「ふにゃん！」

わっ！突然抱き付いて来た！どうしちゃったのこの娘。

「ふにゃあああ…。」

え、何この温かい液体？みたいな感じ……。

「ひにゃ〜。」

かなり気持ちよさそうな顔してる……て、まさか…。

勇気を振り絞り、下を見る。

「…やっぱ？」

そこは見事にお漏らしされてました

「え〜と、私はこれを始末しなきゃいけないのね？」

辺りを見回すと、完全に伸びてる麗二がいた。

「麗二〜、起きろ〜、この状態を何とかして〜。」

助けは空しくリビングに響く。

…やるしかない訳ね。

「はあ……」

…よし！頑張りますか！

そうと決まれば、この娘の服を着替えせなきゃいけないわね。

「ふにゃあ。」

「よしよし、待っててね？今着替えさせてあげるからね。（共通語）」

まずはこの娘のパジャマのズボンとパンツを脱がして、タオルで拭く。

「よしよし…。」

そして次は着替えを持って来るとして、どこにあるんだろうか？

「着替えどこにあるか分かる？（共通語）」

「ふにゃ！」

…分かるみたいね。

「ふにゃひにゃ！」

指差されてるのは、二階か。

すぐに二階に上がり、服を取って来た。（ここまでで五分かかってない）

「ふあゝにゃゝ…」

欠伸がなんか可愛い…じゃなくて！早く着せなきゃ風邪引く！

「早く寝なさいねー。」

さて、一段落付いた所で麗二が何故倒れてるか確かめないと。

「麗二い？大丈夫？て、顔赤いじゃない！」

顔が赤く、苦しそうに麗二は寝ていた。

「うん、風邪ね。間違いなく。」

こんな所に寝かせられないし、部屋に持って行くか…。

「ぐう…」

本当に世話のかかる夫ね。

「うんしょっと！」

麗二をベッドに落とし（優しく）、額に絞ったタオルを当てる。

「ふう…、これでOKね。」

桃色の髪をかき上げ、服を脱ぎ始める。

「…今度の夫は、いつまで保つのかしら。」

そう呟き、布団の中に入る。

「出来るなら、死なないでね、私の愛しい人。」

その閉じた瞳から、光る筋が流れた。

おまけ

## 次の日

「うわっ！メアどうして裸なんだ！？」

「分かりません…」

「て、おい！二度寝すんな！」

「離して、なんか疲れてるんですから！」

「おいこら！」

「はなして！」

「てゆうか、このタオルは誰がしたんだ？」

「「にやあにやあにやあ（知らない）！」」

「…じゃあ、一体誰が？」

不幸その六 彼女は謎が多いです。（後書き）

今回の話を読んで、嫌いにならないでください。それだけが私の叫びです。

麗二「このボケ作者。」

レイン「なに！？いきなり失礼だよ！？」

麗二「ふん、お前には作者の資格がない。」

レイン「酷い！そこまで言う！？」

麗二「これからもこの馬鹿作者をよろしくお願いします。」

レイン「無視！？しかも勝手に終わらすなー！！！」

作者との語らい

終わり

またね

不幸その七 残念ながら彼女は俺の姉です。(前書き)

六話からかなり間隔を置いて出してみました。すみません。

不幸その七 残念ながら彼女は俺の姉です。

えゝ、前回熱のせいで正気&意識を保てなかった麗二です。

どうやら俺は風邪を引いたみたいなので、病院に來ています。

「五膳麗二さんゝ。」

「はい。」

今回のメア達は、家でお留守番だ。…正直心配だけど。

「五膳さんは今日少し熱があつたんですよ？」

えらく美人な先生だな。て、待てやこらあ！！

「な、何で姉さんがいるんですか！？」

そこにいたのは、間違いなく俺の姉でした。

「てか今までどこ行つてたんだよ！」

「どこつて…地獄？」

「ふざけんな。」

「本当！本当なのよ！？」

いきなり何言い出すんだこの馬鹿姉。

「だって上半身吹っ飛ばされたら誰だって地獄に行くでしょ？」

いや、普通はあの世だろ？なんで即地獄行き？

「てか、上半身吹っ飛んだって嘘だろ？」

「マジよ、マジ！」

何でここで近寄る。てか、顔近いんだよ。鼻息荒いんだよ。でも何か言い匂い、じゃねえよ！！俺は変態か！

「分かったから、てかマジ顔近いんですけど。」

「ごめんごめん。」

てゆうか、また胸デカくなったな。

「てゆうか、また胸デカくなったな。って思ったでしょ。」

姉は、嬉しそうに胸を揺らす、じゃなかった。腰をくねらせて、快感に浸っている。

「人の心を読むなよ。…姉さん！？」

姉さんが急に抱き付く。

「も、私の事は香奈、て読んでっけていつも体に教えてるでしょお？」

何誤解生む様な事言っただよ、馬鹿姉え。

「馬鹿姉、良いから離れろ。」

「やだ！もっとうしていたい！」

駄々こねるな。子供かアンタ。

「離れろ。」

「やだ！」

「放せ。」

「いゝやゝだ〜！」

なかなかしぶといな。我が姉ながら強い。

「てゆうか、俺風邪引いてるんですけど。」

「私の胸の中で癒されなさい。はあ、はあ」

そして、馬鹿姉はまた腰をくねらす。

「てか、苦しいんですけど。」

馬鹿姉の無駄にデカい胸に俺の頭は挟まってる為、脱出不可能。

「もっと興奮して、そして私を食べて！」

ボキッ

「痛い痛い！離して離して！」

ボキキッ

「きゃあ！」

馬鹿姉は叫ぶと、後ろに飛び上がって自分で自分を抱いた。

「さっさと離さないから痛い目見るんだ。」

馬鹿姉から逃げる唯一の方法。それは、馬鹿姉を抱き締める事。しかも全力でそれをするのだ。当然相手は痛みに耐えかねて手を離す。

「酷いよ麗ちゃん！」

馬鹿姉は涙目で俺を睨む。

「これやらないで！っていつも言ってたよね！？」

その言葉、ソックリそのまま返すよ、馬鹿姉。

「抱き着くなって、いつも言ってたよな、馬鹿姉。」

あ、馬鹿姉って言っちゃった！まあ、いつか

「酷いよ馬鹿姉は〜！」

また馬鹿姉が抱きつこうとするが、当然避けた。

「避けないでよ〜！」

馬鹿姉は必死に俺を掴まえようとする。

「診察しなくても良いの〜！」

忘れてたよ、馬鹿姉のせいで。

「馬鹿姉が止めればね。」

しかし馬鹿姉め、いつまでやるつもりだ？

「なんか頭痛くなつて来たな。」

しかも頭が割れる様な痛み。

「早く掴まってよ〜！でないと診察出来ないよ〜！」

抱きつかんでも診察は出来るだろ、馬鹿姉。

「う!?!」

くっ、頭痛が酷くなった！

「スキあり!」

頭痛で動きが一瞬止まったせいで、馬鹿姉は俺を掴まえてしまった。

「ちっ。」

あゝ、最悪だ。

「いただきまゝむぐっ!？」

「いい加減診察しろ。」

「あ、あふあふあえ。」

「問答無用。」

馬鹿姉がちゃんと喋れないのは、俺の指を突っ込んだからだ。

「てゆうか、馬鹿姉医師免許持ってんの？」

馬鹿姉が医師免許持ってるとて、初耳だよ。

「そんなの、似た様な免許腐る程持つてるしい。」

「そうすか、なら早く診察しろ。」

「まあ、麗二ちゃん急かさないですよ。誤診しちゃうじゃない」

「え…。」

何その違和感のない冗談。かなり心配になるじゃないか。

「じゃあ始めるよ〜！」

「…」

その後、無事診察を終えた俺は馬鹿姉を連れて家に帰って来た。

「ただいまー！」

「はあ…」

五膳麗二宅

「お帰り〜」

「ふにゃあ〜」

メアとヘルが仲良く片足を結んで歩いて来る。てか、二人三脚？  
少しヘルの身長が高いせいで大変そうだな。

「「ふぎゃー！」」

お〜、仲良く転んだもんだ。あ〜、ヘル涙目で耐えてるよ。偉い  
なあ、後で良い子良い子してあげるか。

「誰？この子達。」

俺が親父臭い思考をしていたら、馬鹿姉はただ呆然とメア達を眺

めていたが、やっとの事で口を開いた。

「えーと、この子達は…」

どうしようか、メア達の事を忘れてたよ。

「か…」

「か？」

「可愛いいい！！！！」

「うお！」

「きゃあ！」

「ひぎゃ！」

馬鹿姉は、俺を突き飛ばしてメア達に抱き付いた。

「うぐ、麗二！この人誰？」

「ふぎゃ。」

「えーと、それは」

「ねえねえ！この子達の名前は？」

「メアにヘルだ。」

「可愛いいい！！可愛い過ぎるよこの子達！」

そうですか。

「ふぎゃー！」

嗚呼、メア達の悲鳴が聞こえるけど無視しよう。

「次回大変そうだな。」

本当に大変な展開は無視しよう。

「いやー！」

「ひにゃー！」

「うふふー！」

「はぁ、面倒くさ。」

こうして、馬鹿姉はやって来た。そして、これからの生活が不安だ。

疲れた。

不幸その七 残念ながら彼女は俺の姉です。(後書き)

評価感想をいつもおまちしております

キャラクタープロフィール

五膳 麗二ゴゼンレイジ

誕生日 2月14日

年齢 15歳

身長 170cm

体重 50kg

好きな物 特に無し。

嫌いな物 ウザイ奴全て

外見

黒髪黒眼。伸びきった前髪は、左目をいつも覆っている為、普段は見えない。身長体重共に普通。中肉中背。

性格及び環境設定

運動神経は結構良い方。趣味は読書。割りと大人しい性格だが、メア達の前では正常ではいられなくなる。少しSである。家族構成は父、母、姉で、姉は高校卒業後に失踪。両親とはそこそこの仲が良かった。しかし、両親は春にあった交通事故により、二人とも死亡。事故の原因は不明。その後、両親の幻覚が現れ、麗二の精神を蝕んでいくが、魔王との出会いにより、幻覚は消えた。しかし、精神的には傷は癒えてはいない。

#### 特技

相手の脳に直接作用する術。

身近な物は殆ど武器に出来る。

次回は、メアについてです。それでは皆さんまた次回へ

終わり

不幸その八 彼女は怒ると恐いです。(前書き)

七話からだいぶ時間がかかってしまいました。本当にすみません。

後書きにキャラプロフィールをかいてますので、是非読んで見てください。

後、評価感想をお待ちしております。

不幸その八 彼女は怒ると恐いです。

## 五膳麗二宅

4時38分

ども、麗二です。

前回、俺の馬鹿姉が突然この町に帰って来ちゃいました。

そして馬鹿姉が現れたせいで、いろいろと面倒な展開になってしまい、問題が生まれてしまった。

率直に言っと、馬鹿姉がメア達と見事に御対面を果たした訳だ。そして

「あははははは！」

「かゝわいいい！」

「ひにゃー！」

…なんか大変な展開にな

「あははははは！次！コレ！」

「きゃはははははー！」

「ふぎゃー!!」

とにかく面倒なてんか

「ぎゃはははははー!」

「ふぎゃあー!!」

いい加減…

「黙れえええ!!」

ガンツ! ミシベキン!

テーブルが強めの踵落とし(俺の)をまともにくらい、見事に真つ二つになった。

「「はい。」」

「ひにゃ。」

「うん、素直でよろしい!」

静かになったのは良いが、テーブル壊しちまったな、どうしょ。

今月は結構出費が大きいのに…。

「あゝ?」

「なんだ馬鹿姉。」

「いや、その馬鹿姉って止めて欲しいんだけどー。」

「止めて欲しいなら馬鹿な事をするな。」

「えー、それはチョット…」

「じゃあ黙れ。馬鹿姉。」

「はい…」

馬鹿姉はかなり落ちこんだらしく（俺の言葉遣いに）、ヘルの肩を借りて灰になっている。

「ところで、馬鹿姉は何故帰って来た？」

「それはね！」

自分の話題が出た瞬間に、馬鹿姉は元気を取り戻した。まじうぜえ。

「聞きたい！？ね！聞きたいのねっ！？」

近寄んな、抱き付くな、暑苦しいんだよ。

「良いから話せ。」

「昔々、ある所に」

ミシミシ

「ぎゃ！」

「何話そうとしてるのかな、馬鹿姉？」

また力一杯抱き締める。

「分かった分かった！話すから止めて麗二ちゃん！」

馬鹿姉を締め付ける力を抜く。

「はあ、痛いよお麗二ちゃん！」

「話せ、そして放せ。」

「もう、本当は嬉しいくせにい！」

凶星だよ馬鹿姉。

「…何故来た？」

「無視！？…まあいいか。」

「また金でも借りに来たのか？」

昔から金遣い荒いしね、馬鹿姉は。

「違うよ、親が死んだら誰だって里帰りするわよ。」

「…そうだったな。」

そういや死んだんだよな、メア達と暮らし始めてからいつの間にか両親の事はすっかり忘れてたよ。

「だからあ、私はあなたの世話をする為に来たの。」

それは弟思いな馬鹿姉らしい考えだな。

「心配せんでも自分の世話くらい出来るよ。」

それに今はメア達がいるしな。

「そう？なら良いんだけど。」

残念そうに俯くが、次の瞬間にはいつもの馬鹿姉に戻っていた。

「じゃあさ！じゃあさ！」

何言いつ出そうとしてるんだ馬鹿姉。

「明日から私もここに住むよ！」

は？

「両親がいないからさびしいでしょ？だから私をお母さんだとふおへっ、ひひゃいひひゃい！」

「黙れ、馬鹿姉。」

馬鹿姉がきちんと喋れなかったのは俺が、頬を本気でつねったからだ。

「大体家に2年も帰ってこないというのはどういう事だ？お袋と親父は毎日心配していたんだぞ？しかも帰って来たかと思えば1分もいなかったぞ！」

「ほへんはいほへんはい！（ごめんなさいごめんなさい！）」

馬鹿姉が反省したと思い、つねるのを止めた。

「分かれば良し。」

「酷いよお、こんなに痛いのだよお……」

「反省しますか？」

殺気を込めて馬鹿姉に言う。

「してます、土下座しても構いません、はい。」

「宜しい。」

馬鹿姉に反省させたは良いが、これからどうし

「マキ○○ムキ○ノン！」

「ぐげっ！？」

俺が考えにふけっていると、後ろから脊髓めがけて正拳突きが放

たれ、見事に直撃した。

「ぐう……」

「大丈夫麗二ちゃん!?」

「わっはっはっはっは!」

「……くっ!」

「立てる?麗二ちゃん!」

「わっはっはっはっは、げほ!?!ごほっ!」

ブッチン

「メアアア!?!?!」

俺が大声で呼ぶと、メアは驚いた様な目で見た。

「げほ!復活が早過ぎ!?!」

「人に不意打ちかましといて、その言葉か?」

背中の痛みは今最高潮。怒りも最高潮です。

「食らえ!飛び蹴り!」

メアが跳び、俺に向かって来た。

「せいやあ！」

ゴン！

だが俺はメアを躲し、テレビとのキスを堪能させた。

「くっ！やるわね麗。」

「そりやどうも。」

「でもまだよ！」

メアはまたも跳躍をし、飛び掛かって来た。

ぬるい。

「ひぎゃ！？」

飛び掛かって来たメアをギリギリで避け、そのまま上半身を流れにそって投げ飛ばした。

ぐん！

かなり痛そうな音だ…

「まだやんのか？」

殺気を込めて聞く。

「え…いや、もう良いです。」

「とゆうか何で俺に向かって来たんだ？」

「だって構ってくれないんだもの！しょうがないじゃない」

メア、いつぺん死んでみる？

「あの〜？」

俺がメアに対して殺意を抱いていると、後ろから馬鹿姉の遠慮がちな声が聞こえた。

「何？」

「あの、顔が怖いんですが？」

いけね、顔そのままだった。

「何？馬鹿姉。」

「さっきから聞こうと思ってたんだけど、その娘達誰？」

！そっぴや忘れてた、って馬鹿姉？顔がチョットというか、かなり般若に近付いていますよ？

「メチャクチャ怖いんですけど。」

横でメアとヘルが抱き合って震えてるんですけど。

「誰？」

浮気した夫を責める妻の様に聞く。

「えゝ、それはですねゝ。」

馬鹿姉達に構っているうちに、すっかり忘れてたよコンチクショ  
ー！

「誰？」

あれ幻かな？後ろにお袋と親父が見える…

「だ・れ？」

本当の事言っちゃおうかな？マジで。

メアを見ると、首を縦にブンブン振っている。

（本当に大丈夫か？）

（うんうん！大丈夫だから！早くなんとかしてゝ！！チビっちゃん  
よ！！）

「誰なのかな？」

うん、言っちゃお。

こうして全てを白状し、なんとか危機を回避した俺達でした。

「…チビっちゃん。」

回避出来ませんでした…

不幸その八 彼女は怒ると恐いです。(後書き)

お陰様で総PV一万突破！ 本当にありがとうございます！これから頑張るので宜しくお願いします！

## キャラプロフィール

メア・クロル

誕生日 不明

年齢 14歳(人間の年齢に換算した場合)

身長 151cm

体重 秘密

好きな物

スイカ

魔王

麗二

嫌いな物

威張った奴

## 外見

桃色の髪と瞳。髪は綺麗なストレートで、腰まで届く。童顔の為、実年齢よりも2、3歳若く見られる。が、その幼い外見とは裏腹に、胸などは結構成長している。

## 性格と環境設定

基本的に明るい性格をしており、何事も前向きに考える。麗二の事は、異性としてというよりも、兄と見ている。メアと魔王は親子か姉妹のような関係で、よく甘えている。魔王同様、過去については不明な点が多い。

## 特技

早食い

大食い

いたずら

またね〜

不幸その九 彼女はトラブルメーカーです。(前書き)

今回はかなり短めになってます。すみません。しかもキャラクタープロフィールが中止になっちゃいました。本当にすみません。

不幸その九 彼女はトラブルメーカーです。

「早く〜！」

「ああ、今行くから黙れ。」

こんにちわ、麗二です。

「麗二と一緒に風呂なんて何年ぶりかしら？」

嬉しそうにするな、馬鹿姉。

「は・や・く」

今は夕方、いつもメア達をお風呂に入れる時間です。

同時に、メア達がかかりハイテンションになる時間帯でもあります。そこまでならまだいいんだが、今日は馬鹿姉までもが一緒に入ると抜かしやがった。正直馬鹿姉が来ると、俺は死んだも同然だ。何故かって？考えてもみるよ。仮にも思春期の男だぞ？一緒に異性が風呂に入るっただけで理性が死にかけてるのに、三人だぞ、三人！しかも一人はかなりのナイスバディと来た。俺、もう疲れたよ…、パトラッシュ。

俺が現実逃避をしていると、横で話してた馬鹿姉が不機嫌になってまた抱き締めて来た。

「!？」

「もう！人が話をしているのに無視するなんて、男として最低だよ  
麗二」

「！むが！まつ！！？」

息が出来ない！

「お仕置として抱き締めるわよ」

し、死ぬ！窒息して死ぬぞ俺！

そんな俺の危機を知らずに、続行する馬鹿姉。

「うふふ」

うん、殺ろ。

メキメキ

「きゃあ！？」

うん、反応速度が上がってるな、馬鹿姉。

「酷いじゃな、もが！？」

うん、やかましいから手突っ込んで黙らせる。

「さて、どうしたらいいんだ俺。」

ホントにこの三人と入ったらヤベエよ。

「早く〜！」

あゝ、悪魔の声がする〜！

「ひにゃ！」

「遅いよ！」

…行くしかないのかえ？

~~~~~

五分後

結局入るハメになったとき。

「メア、寄るな。」

「いや〜 離れたら香奈さんにぎゅう！ってされるから駄目〜」

「頼むから離れろ。そして姉よ、何故この狭苦しい風呂に入ろうとしている。」

「何故って？御答えしましょう！」

パクンな馬鹿姉。

「麗二と裸で密着したいからに決まってんじゃないですかぁ！」

訂正、変態ブラコン馬鹿姉だ。

「ヒッドーイ!!」

心読むなよ。

「スキアリ!」

馬鹿姉はそう叫んで飛び込んで来た。

てゆうかスキアリじゃなかったよ? しかも風呂場でジャンプなんてする? 普通。

結果。

ゴツン!

「ぐあ!」

「ぎゃ!」

「ぎゃあ!」

「ひぎゃ!」

綺麗に四人の声がハモリ、気失った。

ちなみに、俺が目を醒ました時、二時間が過ぎてました。

…最悪だ。



不幸その九 彼女はトラブルメーカーです。(後書き)

今日中にまた出すと思います。そしてこれからも宜しくお願いします。

不幸その十 彼女が好きです。(前書き)

こんばんわ、今回はあまり笑えない話です。すみません。ちなみに、完結ではありませんよ皆さん!?

不幸その十 彼女が好きです。

「ふあゝ。」

どうもこんばんわ、眠気全開の麗二です。ちなみに12時過ぎています。

「眠い。」

何故こんな時間に起きてるかって？

ポケットから指輪を取り出す。

魔王に会う為に決ってんじゃないすかあ！

その紅い指輪を指にはめた。

「おっはようん」

俺が来た瞬間にすぐ飛び掛かって来れるって、どれだけ反射神経良いんだ？後朝じゃねーぞ馬鹿。

「頼むから止めてくれか？魔王？」

魔王を振り向くと、顔が怒ってやがった。何故？

「魔王じゃなくて名前で呼んでよ、麗二？」

「分かったから離れてくれないか？」

柔らかいもんが形変えてるんだが。

「久し振りに来たんだからもっとやらせて」

…止めて欲しいのに止めて欲しくない自分がある。…俺の変態。

「とにかく止める。」

ここは自分に勝たねば！

「駄目 気持ち良いんでしょう？」

ハイ、そうです。

「頼むから離れろ！話が出来ん！後、話が進まんだろが！」

仕方無く俺は魔王を背負い投げした。

「ふぎゃー！」

「さて、これで話が出るな。」

「痛いよぉ？ダーリン」

「痛そうに見えんぞ、魔王。」

それに顔が嬉しそうだし、よだれ垂れてるし…

「そんな事無いよ？後名前前で呼んでって、さっきも言ったよ？」

「うん？名前忘れたから別にこれで良いだろ？」

本当は忘れてないけどな。

「私の名前はロメア・クロルタリアだよ！ちゃんと覚えて！」

「ハイハイ分かりましたよ。」

「ハイは一回！」

「はい。」

「ところで話って何？」

…忘れてたよ。胸の感触で。

「俺が何故殺されなきゃいけないんだ？」

「それは、あの…」

「何隠してる、ロメア。」

俺はロメアの顔を真直ぐ見る。

「分かった。話すよ…。」

彼女にしては感情の籠らない顔で、話し始めた。

「魔王との結婚は、絶対の権力と、膨大な富を手に入れるのと同義

だと言う事を初めに言っておきます。」

そんなオプシヨンがあったのか!?

「しかし、それはあくまで結婚をしたらの話です。」

「どついう事だ?」

「仮に婚約をしたとしても、結婚をしなければ意味が無いと言う事です。」

「そ、それはつまり、こ、殺」

「結婚をする前に殺してしまえば全て無かった事になると言う事です。」

「だから俺は殺されそうになったんだな?」

まあ、軽くやばい程度だったな、アレは。

「普通は魔界で一番強い者から選ばれるけれど、そいつは既に始末されていたの。」

俺、死亡確定?

「それであなたが選ばれたの。」

「えゝ!? 何故俺になるのそこで!?!」

「私が決めたの、貴方に。」

ロメアはその唇を俺のに重ねた。そして、またすぐに離れた。

「それでも、貴方は私を選んでくれる？」

ロメアが最初、何を聞いているのか分からなかった。

「貴方はまだ、私を好きになれる？」

二度目にして、やっとその意味を理解し、頭を働かせる。

コノ女トイツショニイレバ、死ヌンダゾ？

黙れ。

コンナ女のタメに死ヌノカ？オマエハソンナニ死ニタイノカ？

黙れ！

コンナ女ジャナクテモ、イイ女ナラマダイツパイイルダロウ？

黙れ幻！！

目ヲサマセ、ソシテヨクカンガエロ。

「黙れええ！！！！」

叫んだ。次の瞬間には、俺は叫んでいた。

「選ぶ？じゃねえよ！！初めから決まってるだよ！！」

そうだ。あの時から俺は、決めていたんだ。

（宜しくね ダーリン）

そう、決まっている。

「どんな不幸に見舞われようが、俺はお前が好きだ！！」

そう、どんなものが来ても俺は！

「お前を好きでいる。たとえ世界が俺を殺しにかかって来ても、だ。」

俺は言い終えると、急に恥ずかしくなってきた、顔を逸らす。

「ありがとう、麗二。」

その声に反応し、ロメアを見ると、大粒の涙を流しながら笑っていた。

「ありがとう。」

俺はロメアを抱き締めた。

「別に礼を言っても貰っても困る。これは俺の意思なんだから。」

「ありがとう。」

「だからあ、礼はいらねえよ。」

ロメアを一度離し、口付けをした。今度は可愛いからではなく、好きだからキスを交わした。

「こっちこそ、ありがとうな。ロメア。」

俺は危険という理由で彼女から手を引いたくない。この先どんな事があっても、俺はお前を好きでいる。

ずっと。

不幸その十 彼女が好きです。(後書き)

えゝ今回は、キャラクタープロフィール無しです。すみません。  
てゆうかすみませんが多すぎ！後、次回からは少しタイトルの書き方が変わってます。

では、また次回お会いしましょう。

不幸その十一 彼女の料理は普通に美味しいです。(前書き)

ども、おはようございます。レイン氷花です。

前回、サブタイトルの書き方を変えるとかぬかしてましたが全然変わってません。

不幸その十一 彼女の料理は普通に美味しいです。

「今何時!？」

ども、今起きた麗二です。今日は入学式で、当然早く起きなければいけない日なんだが、こうゆう日に限って寝坊をしてしまう自分に怒りを覚える今日この頃。

「つーか、メア達がいねえな。」

昨日あんなに遅く寝たのに早え〜。

まあ、その前に着替えよう、制服に。

五分後

「着替え終わったのは良いが、目覚しはどうして鳴らなかったんだ?」

目覚しがある所を見ると、そこには真っ二つになった目覚しが…

真っ二つになった目覚し…

「誰だあゝ!!目覚しを真っ二つにしたやろつはあ!!!」

大急ぎで一階に降りようとし、見事に足を滑らして転がり落ちた。

「ががががががが!!」

ゴン!!

「し、死ぬ…」

俺は盛大に顔面を強打し、激痛に床を転げ回る。

「いつつう…」

誰かいないのか？少しは心配してくれてもいいのによ。

「てゆうかキッチンにいんのか？」

声がそこから聞こえるんだが。

「おーい、何やってんだお前ら。」

「あ、起きたの麗二い？」

うん、まずはおたまを持っているメアだね。めっちゃ不自然だ。

「ふにい？」

続いて、エプロンを着たヘル。うん、可愛い。今直ぐに抱き締めたいくらい。

「麗二ちゃんおはよう」

最後に、眼鏡にエプロン姿、ウサミミで裸かよ。違和感バリバリだよ！目の保養にはなったけどな。

「朝っぱらからおめえら何してる?」

「朝ご飯!!」

「ひにゃ?」

ヘルだけハモってねえ。

「分かった。とりあえず目覚しを壊した奴出て来い。」

「なんか問題でもあったの?」

馬鹿姉よ、問題ありすぎだ。

「反省の色が見えないので処刑します。」

「ま、待つて!? 悪気があったわけじゃないんだよ!? 安眠を邪魔する物は滅んで当然じゃない!」

「死刑。」

ぎゅいいいいいん!!!

馬鹿姉をどうしているかは御想像におまかせします。

五分後

「はあ、朝っぱらから無駄な時間を使ってしまった。」

「そう思うの、なら、やらないで、よ…」

がくっ

馬鹿姉は力尽きた。

「俺は学校だから行くぞ？」

「え！？」

うん、メアと馬鹿姉がハモったな。てか馬鹿姉復活早え。

「なんだ？なんか用なのか？」

「え…、朝食食べないの？」

「朝食？そっぴや作ったとか抜かしてたな。」

どんな味が…、恐え〜よ。考えたくねえよ！考えたけどさ。

「では言ってきま〜す！」

危険回避！…出来ませんでした…。

「…何してる？ヘル。」

ヘルが俺の腕をがちりロックしてやがる。

「食うしかないわけね。」

渋々テーブルにつき、料理？を見る。

…多分、大丈夫か。

「見た目は普通だな。」

「酷いよ麗二ちゃん！一生懸命作ったのにい！！」

いや、馬鹿姉の事じゃ無いからね？メアの事だからね？

「さあ、召し上げれ。」

メアよ、笑顔ですすめないでくれ。心が痛む。

試しに一口食う。

………

「…うまいな。」

「でしょ！？よく魔王様に褒められるんだ。」

「信じられん。あの、自分で服を脱ぐ事すら出来ないメアが…」

「それはメアちゃんに対して失礼よ？麗二ちゃん。」

「驚天動地だ。明日は隕石が降るな。」

それとも世界の終わりか？

「気持ちは分かるけど美味しかったでしょ？」

「分かるの！？」

そりゃ驚くよなメア。てか分かるよな？馬鹿姉。

「さて、朝飯は食ったし行きますか！」

「「早っ！！」」

「行つてきまゝす！」

ボタン！

「…」

「…」

「…」

「行っちゃったね…」

「行きましたね。香奈さん…」

「うん…」

「あっ！」

「なに？メアちゃん。」

「ひにゃ？」

「大事な事を言い忘れてました。」

「アレか。」

「ひにゃ？」

「私も学校に行くって事。」

「ま、良いんじゃない？」

「ですね」

「ふにゃ」

「「あははははは！」」

……

……

……

「「……ホントに大丈夫だね？」」

不幸その十一 彼女の料理は普通に美味しいです。（後書き）

今回の出来栄えはどうでしたか？

相変わらず駄文で、面白みの無い小説ですが、これからも宜しく  
お願いします。

はい、今回もキャラクタープロフィール無しです。すみません。  
変わりと言ってはなんですが細かな設定等紹介します。  
では、また次回にお会いしましょう。

紅い指輪。

魔王の寝室に魔王以外の者が行く為の唯一の鍵で、指にはめてい  
る間だけ寝室にいられる。外装は、深紅のリングに小さいルビーが  
はめ込まれている。その価値は値段が付けられない程で、よく争い  
が起きてしまう。ちなみに、生き物以外は使えないように出来てい  
る。

終わり

またね〜

不幸その十二 彼女は無口です。(前書き)

どうもお久し振りです！今回はあまり面白くないです。  
すみません。力不足で。

不幸その十二 彼女は無口です。

「…」

「…」

「…」

「…」

ども、おはよう。麗二です。無言のスタートです。何故そう  
なったかは一分前。

~~~~~

「ふあ…」

大きな欠伸をし、人気の無い通学路をノロノロと歩く。

「眠…」

あれ？眠気のせいで意識が朦朧として来た…

「うああ！？」

目を擦ってた時に、石に躓いてしまってバランスを崩しかけたが、  
なんとかクリア！

ガッツ

「て、うぁー!!?」

更に石に躓き、前を歩いていた女子の肩を掴んでしまった。

「?」

当然肩掴まれたら振り向くのが人というもの、そして振り向かれた事でまたバランスを崩した。

「ぎゃあ!!」

「!?!」

見事に俺は彼女を押し倒してしまい、はたから見れば無理矢理押し倒した様にも見える体制に。

「…」

「…」

で、最初に戻る。

「…」

「…」

「…」

何?この空気…

「  
…」

何か喋って!?

「  
…」

彼女は無言で俺を見ている。

「  
…」

もしかして、気絶してる?

顔の前で手を振ってみる。

「  
…?」

反応アリイイ!!?

「いや、そのわざとじゃ無いからな!？」

「  
…」

はい必死の言い訳無視いい!!!

「その、済まん!」

頭を下げると、胸に当たった。

「け!？」

今のは俺、驚いたせいで変な声出してしまった。

「……？」

「いや、あ、え！？」

「……」

「すまん！！？」

「……」

なおも彼女は無言。

「とりあえず退くな！」

俺は急いで立ち上がり、仰向けに倒れている彼女を起こした。

「……」

ハイ無言了。

「あの、出来たら名前教えてくれないか？」

今更なんだが、コイツ眼鏡付けてたんだな。どうでもいいけど。

「……」

「あの、やっぱり……」

「  
…」

？今、微かに…

「  
…姫川…」

今度は少し聞こえた。

「  
…姫川來桜…」

ひめかわくおう？なんか、変な名前だ。人の事言えんけど…

「來桜か…、よ、宜しくな！俺は…」

て、うおーい！！待てよ！

スタスタ

俺の名前は聞かずに行きやがった…

「  
…俺…嫌われたかな？」

そうだよね、いきなり押し倒す奴なんか関わりたくないよな？

「あははははは！……………うっ……」

涙出て来た。

そうして、俺は泣きながら登校した。

不幸その十二 彼女は無口です。(後書き)

どうも！だらだらと学校編に入らなくてすみません。  
これからはもっとがんばりますので宜しく願いします！！

不幸その十三 彼女は個性的な先生です。(前書き)

だんだん、ネタが尽きてきた…

不幸その十三 彼女は個性的な先生です。

どうもお久し振りです！お馴染みの麗二です。

今俺は入学式を終え、これから一年間世話になる教室で先生の自己紹介を聞いています。

「オッス！これから一年間テメエラの世話をする天王寺萌だ！宜しく！！」

これがこのクラスの担任だ。

「じゃ、ホームルーム終わりって事で！」

待てや！！

「あ、そっぴや言い忘れてた。」

先生が足を止めて、教卓に戻っていく。

「俺は普通の教育は嫌いだ！義務教育？体罰禁止？そんなものはいらん！ゴミ箱に捨ててくれ！」

いやいや、先生が言っぴ良い事か？

「後、これは大切だ。こるからお前達の自由で五人グループを作っぴてくれ。もし誰かが何か起こしても、クラスのみんなには迷惑はこ

ない。代わりに、そいつと同じグループの奴が迷惑を被る。そういう制度を作る！良いな！」

なんか個性的な先生だな。

「後、グループは一年間変えないからな？以上。」

今度こそ、先生はどうか行ってしまった。その途端クラスが賑やかになり、グループについての話し声が響き始めた。

「ふう……。」

しかし、初めて見る奴ばっかで溶け込めねえ！クラスの奴等はみんな顔見知りらしく集まってるし、どうしょ！

「あの〜？」

「なんだ？」

振向くと、そこには気の弱そうな男子がいた。

「いや、その、同じグループになろうと声かけたんだけど、だめかな？」

お、お〜！！救世主だ！いや仲間だ！俺と同じく顔見知りがいない仲間だー！！

「喜んでー！！」

「ホント！？ありがとう！僕孤独で死にそうだったよ！」

兎かこいつゝ

「ところでお前の名前は？」

「清水…美花だよ。」

「清水か…」

清水は、少し茶色い髪と瞳、小作りな顔をしている為、美男子とゆうよりも可愛い系だ。小動物みたいで。

「で、グループは？人数にあてはあんのか？」

「うん…あるにはあるんだけど…」

「どうかしたのか？」

「彼女、ちょっと声がかげずらくて…」

「そんな事なら手伝ってやるぞ？」

「本当！？ありがとう！！」

そこまで喜んでもらえたら嬉しいよ。

そして、俺は元気良く問題の女子の所まで来た。

「ようー！」

「ああ？」

うん、かなり怖いね。

その女子は黒髪のストレートで、背は俺より少しだけ小さい感じだ。

「俺達と同じグループになってくれるか？」

その女子は、その鋭い眼光を俺に向けたまま考え込む。

「おい、出来るなら目伏せてくんね？怖いから。」

なんか殺意すら感じる。

「で、どうだ？」

さらに目つきが悪い。

「ちょうど良い、私もそれに困ってた所だ。」

「お？それじゃあ……」

「入る。」

「よし！グループ作り終わりい！」

なんか忘れてるような感じがするが無視無視！

「ふあ……」

さて、残りの時間は昼寝しよ。魔王と会ってて寝不足だから…

「おっひさ〜！」

ドッゴオオオン！！！！

轟音と共に、我がクラスの担任、天王寺萌先生が扉を壊すくらいの音をたてて入って来た。

訂正、扉壊れてる。

「忘れてたけどよ、午後から遅れて来る生徒が一人来るからな。あと、グループは五人だぞ〜？忘れてた奴がいるから気をつけるよ？」

先生、なんで俺を見るんだ？先生は読心術でも使えるのか？ええ？そうですよ、忘れてましたよくそつたれえ！！

「後一つ、最後に決まったグループは生徒指導室に来る事。来なかった場合、停学って事で。」

停学！？

「じゃあまたな〜、麗二い〜」

クラスの視線が俺に集まる…って怖い！なんか殺意の籠った視線が来てるんだけど！！主に男子から。

「あの〜？」

「ん？」

「グループの人数、後二人だけど…ね。」

コイツか…暗い顔して何だっただ？」

「後一人しかいないんだ。」

「？どうゆう意味？」

「つまり、他はもう全部決まっただって一人しかいないんだ。余ってるの…」

それはつまり？

「僕達は最後って事だよ。」

嘘…

「残念ながら、生徒指導室行き決定だよ…。」

終わった…ん？

「待てよ？余りは誰なんだ？」

美花は俺の前の席を見る。

「あの子だよ。」

前にいて気付かなかったよ…なんかすまん。

「ふん。」

その女子のほつを見ると、まず黒髪のショートが見えた。

「おい。」

その女子が振り向く。

「…何？」

眼鏡を上げたままの姿勢で振り向く。

「…？」

え…？

「來桜？」

「…今朝の…」

同じクラスだったのかよ！

「今朝はすまん！アレは事故で」

「…いい」

え？いい？それって許すって事なのか？

「…何？」

「あ、そうだった。」

すっかり忘れてた。

「來桜は余ってるよな？だから俺達と同じグループで良いか？」

「…良い。」

「ホントか！？よし！後は午後から来る奴入れて終わりだ！」

「うん、そうだね。」

『ピンポンパンポン　麗二がいるグループはすぐに来い！以上！』

「…」

「早いな。」

「おう？」

いつの間にか横にあの眼光の女子がいた。ついでに來桜も。

「じゃ、じゃあ行こうか！ね！？」

うん、天敵の登場でテンパってますな。

「さて、行くか。」

こうして俺達は仲良く？生徒指導室へ行きましたとさ。

不幸その十三 彼女は個性的な先生です。(後書き)

魔王はドM!?!お楽しみいただけただけでしょうか?

クレームなども一応受付けています。

では、またお会いしましょう。

不幸その十四 彼女は喧嘩好きです。(前書き)

ども、こんばんわ

スランプを抜け出しました!!

そして、読んでいる読者の皆さんありがとうございます。

これからも、レイン氷花はマイペースで頑張ります!!

不幸その十四 彼女は喧嘩好きです。

「ここか…」

ども、麗二です。今生徒指導室の前にいます。何故ここにいるかって？御答えしましょう！

「早く入れ。」

すみません。だからそんな恐い眼で見ないで下さい。

「そついや名前聞いて無かったよな？」

「今更気付いたか。」

「とにかく、俺は麗二。で、お前は？」

「黒川琥春だ。呼び捨てで良い。」

「ふん。じゃ、行くか。」

コンコン

「失礼します。」

「どうぞ。」

先生のだるそうな返事を聞き、生徒指導室に入る俺達。

「おゝ？なんだお前かあ？なんで？」

あんたが呼んだからだが。

「まあ座れ。」

一列に四つ並んでいる椅子を指差す。

「で、何話すんだっけ？」

人呼んどいて忘れただ？」

「先生……」

清水が遠慮がちにきりだす。

「ああそうだったな。何か話すんだよ。うん。」

まだ思い出して無いのかよ。

「あ、麗二。」

「な、なんですか？」

「そんなに構えんなよ。悲しくなつて来る。」

……すみません。

「午後から来る生徒について説明したいんだが、お前に。」

何故俺？

「何故俺？つて、一緒に住んでんだろ？」

「は？てゆうか先生心読むな。」

「良いじゃんか別に。」

「良くねえ！」

大体、馬鹿姉にしろ、この先生にしろ、俺のプライバシーは無いのかあ！！！！

「…無い」

え、來桜？君もしかして俺の思考…

「…読んでる」

…明日から学校来なくて良い？

「ダメだぞ、麗二。」

「…だめ」

二人共、どんな教育受けて来たの？

「トップシークレット」

「…内緒」

そすか。

「だいぶ話がそれたけど戻すぞ。」

勝手にして…

「メア・クロルって、お前の同居人だろ？」

え？

「…嘘だろ？」

「ホント」

一つ質問。

どうやって入学した？

「知らねえよ。」

そんな先生… 人事みたいに言わなくても…

「だって人事だし。」

冷てっ、例えるならヘルがお漏らしした布団みたいに。

「例えるなら簡単な物にしろや。」

「それらしい例えが思い浮かばねえんだよ。」

「ほう？少し担任に対して口の聞き方が悪くねえか？」

「あんたを担任とは認めたくねえ。」

「ほう！私に喧嘩売ってんのか？」

「八割方は。」

「よし、表出る！！」

「先生！話が逸れてます！」

俺と先生がドアを開けた時に清水が止めに入った。

「邪魔だ生徒。」

えゝ！？清水の名前覚えてないのかよ！清水なんか悲しい表情してるんだけど！！

「屋上が丁度良いだろ？」

この先生、喧嘩好きか？

「てか、怪我しても知りませんよ？」

「臆病者め。」

誰が、臆病者だって？

「ああ？」

「おう！結構良いツラしてんじゃねえか！」

「どっちが強いハッキリさせてやる。」

こうして、俺は何故か先生と一戦を交える事になってしまった。  
…誰が変わって！！

不幸その十四 彼女は喧嘩好きです。(後書き)

今回の感想は？出来栄は？まあ、気にせずにこれからも頑張ります！

麗「気にしろや。」

不幸その十五 彼女は怪力です。(前書き)

ども、おひさしぶりです！今回は続き物です。(一応)

## 不幸その十五 彼女は怪力です。

「眠い…」

ども、眠気全開の麗二です。今、先生と喧嘩する為の場所に向か  
つてる。前回の些細？な事で喧嘩に発展してしまったせいで。うん。

「先生喧嘩好きかよ？」

と、振り向いて清水に問い掛ける。

「なのかなあ？」

清水は頭にクエスチョンマークを作りまくりながら、上の空で答  
える。

「しかし、変な先生だな…。」

呟きながら、前を歩く先生の後ろ姿を見る。

考えれば考える程変な先生だ。

「着いたぞ。」

と、悪戯っ子のような笑みを浮かべながら言う先生はとても楽し  
そうだ。

やっぱり喧嘩好きか、先生。

「うお？」

屋上についた瞬間、俺は思わず声を出してしまった。

「喧嘩にはもってこいだろ？」

先生は、だろ？みたいなノリで言う。

何故俺が屋上に着いただけで驚いたのか、理由は屋上にある。

床がコンクリで柵が鉄製、ここまでは普通だ。だけど広さが異常だろ……。屋上に体育館が二つ入るくらいの面積があった。体育館二つ分くらいの面積をどうやって屋上に作ったのか、そしてどうして作ったのかという疑問はさておき、柵もちよつと普通じゃない。何故こんなに頑丈に、これでもかってぐらいに出来てんだ？

「気にしない気にしない。」

気にしろ、先生。

「で、ここでやるんですか？喧嘩。」

まさかと思いつつ、聞く。

「おう！」

既に柔軟体操をしている先生が無駄に元気な声で答えた。

「止めた方が良いよ麗二君っ！」

清水が必死に止めようとするが、先生はあっち行けっという具合に手を振り、俺は丁寧に断つといた。

「そろそろ行くぞ！麗二！」

5 m前に向かい合って立って、闘志をむき出しに叫ぶ先生。

「こっちも良いぞ先生！」

と、それに叫び返す俺。

「ルールは？」

「無制限」

ニヤリと笑う先生。

ヒューー…

「始め！！！」

先生の合図を屋上に響いた。

ドガン！！！！

「！？」

突然、轟音とともに視界が遮られた。

ヒュンッ

「おわっ！」

粉塵に紛れて見えない前方から来た拳をかわし、素早く後ろにさがる。

ブンッ！

「…！？」

ドガン！！

またコンクリートの破片と粉塵が視界を遮るが、今度はしっかりと見た。あの瞬間に先生は跳躍し、かかと落としをする体勢に入っていて、先生はそれまでの動作を一秒以内に行っていた。

…まず一言。

「あんた人間か？」

「そうだぞ？失敬な事抜かすなよ麗二。」

粉塵の辺りから声が帰って来る。

「今の一撃…」

威力が桁違い、てか当たったら人生終わりDEATHよね。マジで。

「オラア！まだまだ行くぞおお！！！！」

先生改め、怪物が向かって来る。

「はぁ…、俺ってつくづく…」

不幸だ。

ドガンー！！！！

誰か幸せくれ。マジで。

不幸その十五 彼女は怪力です。(後書き)

今回はかなり書き方が変わってと思いますが、ムラがあると思うので、ご勘弁を。

不幸その十六 彼女は喧嘩強過ぎます。(前書き)

ども、お久し振りです。

最近は更新速度が鈍くなってしまつてスイマセン。

今回の出来栄えはいつも通り？だと思います。(多分)

まあ、そんな事は置いといて、と。

楽しんでください！

それでは、本編です！！

ちなみに、今回は久々にキャラクタープロフィールが在ります。

不幸その十六 彼女は喧嘩強過ぎます。

ドガァン！！

踵落としがコンクリートを破壊する音が響く。

「くっ！！」

それを避ける俺。

「やるねえ！麗二い！！！」

興奮した先生の声が屋上に木霊する。

やるねえって、避けなきゃ粉々になるのが分かってたら誰だって  
必死に避けるだろうが。

ちなみに、俺達は今屋上にいる。屋上はかなり広く、この学校の  
体育館と同じくらいの面積だ。柵は二mくらいあり、とても頑丈そ  
うである。以上。

「ふん！」

先生がコンクリートにめり込んだ足を引き抜く。

化けモンか、先生は。



「しまっ！」

俺の一瞬のスキをつき、先生は俺の懷に潜り込むと、勝利の雄叫びを上げた。

そう簡単に負けるか……！！

考えろ！

相手は既に俺の懷に入って、攻撃の体勢に入ってしまったている。避ける事は不可能か。

くそっ！これは使いたくなかったが、そうも言ったらんないし！  
！しかも、ヘルに使った時に失敗しちゃったが……！

仕方ねえ！これにかけるか……！

ドガン……！！

次の瞬間、必殺の右ストレートが決まっていた。

バキミシグシャ……！！

骨が折れ、肉が潰れる音がした。

「あーたぁりい……ん？」

先生が異変に気付き、右手の先を見る。

「！左手で防いだ？」

先生は声を上げ、体勢を整えようとしたが、遅い。

「終わりです。先生」

俺は深呼吸をする。

「なっ！」

先生は俺の意外な行動に面食らって思わず声を出した。

「すうー……」

俺は呼吸を整える。

「良く聴け！これが俺の……！」

最初で最後の反撃だ……！！

「\$%£      §@§&  
‰      † ¶    ……！！……！！」

¶ ¶

屋上に、俺の声が響いた。

「なんだ、これ……？」

先生の体から力が抜けていく。そして、段々と意識が消えてきた。膝を地面につき、前に崩れ落ちようとした所で俺は先生の体を支える。

「危ねえ…！」

このままだったら殺られてたぞ？

ズキッ！

「？！くそっ…！左腕の痛みが今来やがった！」

視界が闇に薄れていく。

「てゆうか、なんで俺こんな目にあってんの？」

大体、なんでこんな怪我負ったんだろ。

意識が完全に途切れた。

~~~~~

「う…？」

…ここは？

「病院だよ。麗二君。」

寝たままで、首を声の方に向ける。

「無様だったぞ？あちこち逃げ回ってるのは。」

「…無様」

琥春よ、お前が戦ってみろ。何も言えなくなるから。

「……」

そして、來桜さん？そんなつまらない物を見る目で見ないでくれ。  
…涙出て来るから。

「で、でも良かったよね！左腕の手術が無事終わって！」

は？

「え…それ、どう言う……？」

「え？だってあんなにグチャグチャになってたらもう、手術するしかないよ？」

ちょい待て。

「今何時？」

「九時だよ？」

おいおい、大変じゃねえか！

「晩御飯を作りー…」

急いで立ち上がろうとしたら、突然視界が90度傾いた。

「寝てる。今は麻酔のせいで体が上手く動かんだろう？」

琥春が諭すように言う。

「ちくしょう！」

俺はまたベッドに横になり、天井を見上げる。

「…てか、手術代どうしょ…（　・　・　・　）」

冷や汗出て来た…。

「大丈夫だよ、麗二君。」

「…美花？どうゆう意味だ？」

「手術代はいらないよ？」

「え？」

「だってここ、おじさんの病院だから」

またゆうけど、…え？

「あ…そうだ。入院費も無料だからね？」

嘘…ん！

「てか入院すんのかよ!!」

「二か月ね」

またまたうそ…ん！

「良かったな、麗二。」

と、琥春が同情をこめた視線で言う。

「ノート…持って来てあげる…」

と、來桜が呟く。

「じゃあな、麗二。また来るよ。」

琥春が別れの挨拶をし、退室した。

「…さよなら」

來桜はそれだけ言うと、すたすたといってしまった。

「僕も帰らないと、じゃあね！麗二君。また明日来るね！」

と、美花も帰ってしまった。

「…」

寂しい……！

「…寝よ。」

そうして、俺は入学式当日から入院するはめになってしまった。

俺、この学校でやっていけるかな？

不幸その十六 彼女は喧嘩強過ぎます。(後書き)

今回の出来はどうでしたか？

麗二「聞かなくても分かってるだが、アホ作者。」

レイン「生きてたのか？麗二。」

麗二「おう？なんだそのなんで死んでないの？みたいな視線は？テ  
メエやつぱりわざとー」

レイン「ハイハイ！ではさようならー！！」

麗二「逃げるなああ！！！」

次回にご期待。

キャラクタープロフィール

ロメア・クロルタリア

誕生日 12月24日

年齢 15歳（人間の年齢に換算した場合。）

身長 166cm

体重 秘密

好きな物

麗二

メア

チーズ

嫌いな物

金

貴族

外見

銀髪紅眼。肌は白く透き通るようなほど白い。スタイルは良い。  
右目が無く。普段は眼帯をつけている。

性格及び環境設定

性格は、基本的に自由奔放。しかし、真面目な一面もある。好きな人には尽くすタイプ。ちなみに、人見知りする方である。メア同様、過去については不明。

不幸その十七 彼女は大人失格です。(前書き)

ども、こんにちわ〜！最近更新鈍くなっちゃってスイマセン。マジで。

後、最近麗二が変態に近付いているように思うのは私だけかな？まあ、そんな事はどうでも良いとして、と。

言い忘れてましたけど、第11部分からは学校編です。学校編はバトルが多くなってきます。

では、本編です。

不幸その十七 彼女は大人失格です。

ども、毎度不幸な麗二です！

予想よりも早く病院行きになってしまった。と、思っている今日この頃。

「歩くのだりい！」

そついや昨日麻酔打ったんだっけ？体がゆづ事を聞かん。

そんなどうでもいい無駄な事を考えながら歩いていると、いつの間にか目的地に着いていた。

「ここが、先生の病室か…。」

朝から探し回ってやっと見つかった先生の病室の前で心を落ち着ける。

案外もう起きてるかもな。なんたって化けモンだし、うちの先生。

ところが、ドアをノックしても反応は無かった。

「…寝てるのか？」

恐る恐るドアを少し開け、中を覗く。

「やっぱ寝てんのか？」

ドアを更にもう少し開け、静かに入る。

「…せんせ？」

反応無し。

俺は先生が寝ている（多分）ベッドに近付く。

やっぱり寝てる。

ベッドでは、先生はぐっすりと寝ていた。

「すうー……」

寝てる時は静かだな、先生。それに綺麗だし。

「…う…？…」

おっ？やっとお目覚めか？

「……………」

「起きたのか？先生。」

「…は？」

「病院。」

「病院？」

「そ。」

「あちゃゝ、負けたのか私。」

「違う違う、引き分けだよ先生。」

「？」

頭の上に？を浮かべている先生に左手を見せる。

「？それは……」

「あんたの攻撃を防いだせいで俺は気絶しちゃったんだぞ？そのせいで先生を気絶させた後に、左手の痛みで気絶しちゃったしな」

骨も肉もグシャグシャにされたからな。

「すまない……、初日から怪我負わせて……」

先生の顔が少し暗くなる。

「気にすんなよ先生。別に気にしてないから。」

「いや、その怪我だと入院しなければならんだろう？」

「大丈夫だ。入院費とかはいらないって、美花が言ってたぞ？」

「美花に払わせたのか!？」

美花、お前名前を覚えてもらってるぞ！良かったな！てか、払わせたって、…俺はそこまで酷くないぞ？

「この病院は、美花のおじさんが院長なんだよ。だから入院費無料にしてもらえたんだよ。」

「そなの？」

「そうなんす。」

先生、そんなに驚いてるって事は、知らなかったんだな…

「いやいや、知ってたぞ！？」

「ハイハイ」。分かりました」

「信じてないなあ！？絶対！！」

「信じてますよ」

「くう〜！！！！」

ハッハッハ。面白いな、先生。

「ところで先生…」

「なんだ？」

俺は疑問を素直に口に出した。



「\$ ¢ & \* §」

ボタン…

俺は先生に子守歌を歌ってあげた。

「さて、部屋に戻るか。」

寝ている先生の顔を見る。

「…す、少しだけなら良いよなあ?」

「すう……」

寝顔可愛いな

こうして、俺はその後30分くらい眺めてたとき。

おまけ

その後

「こんな所で何をしているのですか!?」

「い、いや何も!?!」

「嘘をついても駄目です！そんなに顔近付けてておいて今更しらばつくれても通りませんよ！？」

「いや！これはちよつとですね！！？」

「なにがちよつとですか！！？もう良いです！！あなたとこれ以上話しても無駄です！！今度またこんな事したらタダじゃ済ませませんよ！！！」

「いや！だからそうじゃなくって！！！」

「さつさと部屋に戻りなさい！！！」

「はいいいい！！！」

看護婦さんに怒られた。

「これではまた対策を考えなければいけませんね！！！」

後、その日から看護婦さん達に変な目で見られるようになった…。

ちなみに、看護婦さんの名前は山崎清美と言っそうです。

不幸その十七 彼女は大人失格です。(後書き)

ども、今回も読んで下さった皆様ありがとうございます。次回を  
お楽しみに！！

不幸その十八 彼女は結構優しいです。(前書き)

ども、こんにちわ。

読者の皆さんお久しぶりです。

長い間ずっと更新してなくてすみません。

これからは毎週一回は更新します。

では本編です。

不幸その十八 彼女は結構優しいです。

「暇だ…」

ども、病室で窓の外を羨ましく眺めてる麗二です。何故入院してるかは聞かないください。思い出したくないので。

「暇だ…」

誰か来てくんねえかなあ。

「暇で死にそうだ。」

そんな俺の意志が神様に通じたのか、病室のドアがゆっくりと開く。

「え…？」

来たのは、意外にも来桜だった。

「…」

「…来桜？」

来桜は分度器でしか計れない程微かにうなづく。

「で、お見舞いに来たのか？来桜。」

来桜の格好は、膝まで届くフード付きの茶色いコートに、ジーパ

ンとゆう格好だ。

「…うん」

「そうか。」

「…うん」

「…」

「…」

「…」

は、話が続かねえ！！！折角見舞いに来てくれたのは嬉しいんだが、この…！この沈黙はキツイ！キツ過ぎる！！

「…コレ」

そう言って、右手に下げていた袋を渡す。

「え…？これって、果物？」

デパートの袋に入っていたのは、林檎2個、メロン1個、ミカン3個、後何故かモヤッ○ボール…？

「あ、ありがとな！こんなに果物くれて…」

何か見た目よりも優しい奴なんだなあ、來桜って。

「…そしてコレ」

そう言って、今度はフードに入っている物を差し出す。

「…」

そしてそれを何とか受け取る。

え…何故フードに入れてるのかな？

「…秘密」

そうすか。てか心読むなよ。

「…」

はい無言…。

「…」

あの…、またこの沈黙？

「…」

「…」

「…」

「…」

とりあえず、袋に入っていたモヤッ○ボールを出してみる。

「…」

「…」

「…」

「…」

「…」

「…あの、來桜さん？」

「…何？」

「お腹空きませんか？」

果物ナイフを取り出し、林檎を手取る。

「…少し」

「じゃあ、今林檎剥くからな。」

林檎を剥こうと、ナイフを鞘から取り出そうとする時に、來桜の手が邪魔した。

「？」

「…私が、やる」

ナイフを俺の手から奪い取り、慣れた手つきで剥き始める。

上手いな…

「…コレ」

いつの間にか來桜に見とれていた為、林檎を剥き終わったのが分からずに返事が遅れた。

「あ、ああ！ありがと來桜！」

自分の顔が引きつってるのがよく分かった。

「…食べれる？」

來桜が俺の腕の状態を気にしてか、心配そうに聞いてきた。…無表情で。

プス

無言に耐え切れず、リンゴを一口食う事に逃げた。

「…美味しい？」

うん、美味しい。

それでこの沈黙が無けりやあもつと美味しい。

プス

「…來桜、思ったんだが今って普通に学校だよな？」

「…そうだよ」

「じゃあ、なんでここにいるんだ？」

まさかこんな真面目そうな子がサボる訳ないしな。

「…サボリ」

その通りだったぞコノヤロウ！

「ど、どうして？」

リンゴを皿の上に戻して來桜の目を見る。

「…その方が、楽しいから」

「はい？」

意味が分かんない。

「…麗二と、いた方が楽しいから」

な、何ですと！？

「…兄と、一緒にいるみたいで」

「…そうか。」

ちよっぴり残念だ…

そして俺は綺麗に切られたリンゴを口に頬張る。

うん、やっぱり美味しい。

「てか來桜、兄がいたんだ。」

「…いた」

「ふん、元気か？」

「……………」

返答無し…？

「どうかしたか？來桜。」

もしかして何か俺悪い事した？

と、軽く自己嫌悪プラス來桜の心配により俺の脳がオーバーヒートしそうになる直前、來桜がやっと口を開いてくれた。

「…どうも、しない…ただ、今日は…気分が、良くない、だけ」

そう、絞り出す様に話す來桜の姿に、何故か俺は共感した。

…何で、だ…？

「…だから、帰る」

「えっ？」

來桜は椅子からスッと音も無く立ち上がると、数秒もしない内に帰ってしまった。

「……………何なんだ？ 一体…」

それに、この似た様な感情は…

「…來桜…」

その日俺は來桜が帰った後、余りにも來桜の事が気になった為上手く動かない体で先生の部屋に向かった。

「って事なんだが、何か思い当たる事あるか？」

「ん、そりゃあねえ…」

「はつきり言えよ、萌。」

こちらら動かねえ体無理矢理動かして来てんだ。

「…分かった。というか呼び捨てかコラァ。」

「どうしても良いじゃん萌え〜」

「滅べ！」

「あぶつ！？」

先生改め、萌が投げた殺人級の速度を持った枕が顔面に直撃した。  
てか一瞬死んだ両親見えたよ…

「とにかく話を進めるぞ！」

「あんたが止めたんじゃないか。」

それと俺の息の根も止まりそうだったよ。

「そんな事はどうしても良い！今問題なのは来桜の事じゃないのか！  
？」

そうだけども、俺の命はどうしても良いは悲しいぞ…

「…まったく…話を戻すぞ。…来桜に兄がいるという事は知っている  
な？」

「ああ。」

「じゃあ、その兄が二年前に亡くなっているという事を知っている  
か？」

「え…？」

……二年前…？

「何でも、生まれた時から心臓が弱かったらしくてな。」

じゃあ、俺があの時、

「二年前に軽い病気になって逝っちまったらしい。」

言った言葉は、傷口に塩をかけたようなもんじゃないか…

「ホント呆気なく死んだらしい…」

俺は何て事を…

「…その中でも、来桜が一番悲しんだそうだ。昔から兄にベツタリだったらしいからな…」

「…明日来桜に謝ろう。」

許してくれるとは限らんがな…

俺が椅子から立ち上がり、ドアに向かおうと足を動かそうとした瞬間、萌が馬鹿にするように口を開いた。

「謝んなよ馬鹿野郎？いくら来桜の悲しみが分かっているからってよあ…それはダメだろう？」

じゃあ、どうしろってんだよ…

「じゃあ、どう…」

「馬鹿が!」

「!？」

ガァン!!

言葉を途中で遮られただけじゃなくて、何か硬い物が後頭部に直撃した。

「いつ…てええええええ!!!!？」

当然俺は、その痛みで大絶叫し、床をのたうち回った。

「何だコレ!?! 一体何投げやがった萌ええ!!!!？」

「…アホか、タダの枕だ。」

枕だと!?! あの夜のお供の柔らかいアレか!?!?

「どんだけ力込めて投げてんだコラァ!!」

「…ふん、これで頭は冷めたか？」

先生はやれやれといった様子で溜息を一つつく。

「…お前も肉親が無くす悲しみを知っているんだろう?」

「……ああ。」

「だったら、今かけてやるのは慰めの言葉なんかじゃあ無いだろう？」

…そうだな。忘れていた、あの時の俺が一番欲しかった言葉は…

「分かったらさっさと出ていけ。」

「え？」

「俺は眠たいんだ。男はとっと出ていけ。特にお前は、寝顔フェチというじゃないか。もしお前が獣と化したら、俺が一番危ねえだろうが。」

「え〜〜〜〜？」

「え〜が長い、さっさと部屋に戻れ！この変態があー！」

言って萌は枕に手をかける。

「てか何個あるんだ枕！？」

「つべこべ言わずに出ていけー！」

ゴォン！

「ふがー！！？」

枕を顔面にまともに食らい、俺の意識は途切れた。

だってあんなもんとともに食らって無事じゃすまないだろ？

ちなみに、俺が目を覚めたのはそれから一時間後だった。

不幸その十八 彼女は結構優しいです。(後書き)

今回の出来はどうでしたか？

久しぶりに更新したので書き方が若干変わってしまっていると思いますが、楽しんでくれたのなら嬉しいです。

不幸その十九 彼女はアレで頭が良いそうです。（前書き）

ども、お久し振りです！

最近ここに戻ってきたばかりのレイン氷花です！

いやゝ、本当に長い間お待たせしてすいませんでした。

でも、これからはこの小説が完結するまで頑張ります！

ちなみに、更新スピードは週に一回か二回です。

不幸その十九　彼女はアレで頭が良いそうです。

ども、こんばんわ。最近寝顔フェチという事を自覚した麗二です。

「ふあゝ……」

ちなみに今は十二時、良い子は多分寝ている時間帯だ。

「…眠。」

何故こんな時間まで起きているかつて？

お答えしましょう

只単にロメアにどう会おうか迷っているだけです。はい。

ここ二日俺はロメアに会ってない。

そして、ロメアに毎日会つと約束しておいて会ってないから会えずらい。という事で今俺は悩んでいる。

「うゝん……」

ここはやっぱり素直に謝つとした方が良いか？

「…」

…てか、この思考って意味無くね？

「…早く行こ。」

思考を中断し、軽く自己嫌悪に苛まれながらも俺はポケットから指輪を取り出し、人差し指に嵌める。

「おっひさ」

ゴキン！

「ぐげっ！？」

着いた瞬間、背後から何かが首に物凄い勢いで突撃してきた。そのせいで首が嫌な音をたてた。…マジで痛い。

「もー！二日も来ないから心配したじゃないの！」

ミシミシ…

「ぐ…！」

痛い痛い！抱き締める力強過ぎるから！！

ミシミシメキ…！

「が…あ！」

てか強くなってる！さっきより強くなってるから！！このままだと色んな物出すから！

「やめ…ろ…！」

何とかこれだけは言えた！でもロメアは力を抜く気配が無いんですか！？

「…死…ぬ！」

くそっ！こうなったらアレ使うしかないか！

「」

ミシ。

止まった…あんまりコレは使いたくねえんだけど、仕方ねえわな。

「よつと、」。

ビクンと体が跳ねて、ロメアはその場に座り込んだ。

「ふう、頼むから力を加減しろ、危うく内臓的な物が出そうになったぞ？」

「ごめんなさい…麗二が来た嬉しさで我を失ってた…」

「別にいい、それにそこまで喜んでくれたらこっちだって嬉しいかな。」

ロメアの頭にポンと手を置き、優しく撫でる。

「ありがとう」

ロメアは満面の笑みで見上げ、俺の撫でている手に自分の手を乗せる。

「さて、いつまでも地面に座ってたらいけないし、早くベッドに行くぞ。」

ちなみに今の発言に嫌らしい気持ちは無い。……………多分。

「うん、分かった。」

「よつと。」

ロメアの体を引っ張り、支えてあげる。

はたから見れば抱き合っているように見える。まあ、実際抱き合っているんだがな。

「歩くぞ。」

「うん。」

名残惜しいが、俺は抱き締めていた腕をどかして、少し薄暗いベ

ツドの方へと向かう。

だって離れないと、俺の愚息がロメアの体に反応して臨戦体勢に入ってしまう。それだけは避けなければ。

「ねえ、どうして二日も来なかったの？私寂しくて自【自主規制】しっぱなしだったよ？」

ハハ：何言ってるんだコイツは。危うく俺の愚息が反応しかけたじやねえか。

「冗談はさておき、すまなかった。俺ちよつと怪我して入院したんだよ。」

「えっ！？入院！？どこか怪我したの！？」

「うわっ！？ちよつどこ触ってやがる！？」

いきなり抱きついてくんない！て言いたいけど何か柔らかいから許す。じゃなくてえ！

「大丈夫だから！頼むから一回離れる！！」

すると素直にロメアは俺から離れて、俺の顔を見上げる。

「全く、俺が怪我したのは左腕だけだ。だからそんなに心配すんなって、な？」

そう言い聞かして、ロメアの頭を撫でる。

「それと、二日も来れなくてごめんな。これからは毎日来るようにするからさ　元気出せ」

「ありがとう。やっぱり麗二は優しいね」

そう言って、ロメアは太陽のように笑った。

「そんな事ない。女に手をあげる奴が優しい訳あるかつ。」

その眩しい位の笑顔から俺は目を逸らして、照れ隠しに自分の悪い所をあげる。

「うっん、麗二がするのは皆に対しての信頼の証だよ。」

と、ロメアはそれを否定して真直ぐ麗二の目を見る。

「不器用だけどみんなに優しい…そんな麗二が好きだよ」

「えあ、ちょっ！今の流れで言われると一撃なんですけど!?!」

突然好きと言われ、かなり気が動転してあんま意味が分からない事を口走る。

無自覚でこれ程の威力とは…！

「てそれよりも聞きたい事があつたんだ!」

無理矢理話を変える。うん、苦しい。

「何故メアが学校に入学したんだ！？てか入学出来たのかアレで！？」

「何故って…だってメアが学校に行きたいって言うから…」

「だからって、アレで入学出来んのか？」

普通に考えて、アレは論外だと思うんだが？

「やっぱり麗二もそう思うよね？」

やっぱりって？

「アレでいて結構頭良いんだよ？…馬鹿だけど。」

嘘だ。

「あっ！今嘘だっと思ったでしょ！？」

そうですけど何か？

「信じられないのは分かるけど、本当の事なんだよ？」

「マジでか。」

「マジです。」

「マジでか。」

「マジです。」

「マジでか。」

「マジです。って何回言わせる気!？」

「いやあ、途中から面白くなってきたついつい調子乗っちゃいました」

「まあ、それはともかく。」

「……………」

「……溜め過ぎた。」

「え!?!何が!?!というか何で!?!」

「まあ、それは置いてって……」

「置いてくの!?!」

「眠いからここで寝て良いか?」

「えっ?」

「……………」

「おーい?」

「……………」

「寝るの早!」

「……………」

……………

沈黙。

「もう、世話のかかる夫ね…」

麗二の頭を優しく撫でる。

「でも、そこが好きだよ、麗二。」

もし、あなたがこの試練をクリア出来たなら…

「私は、あなたに全てを捧げます。」

たとえ、魂であつても…

？  
『後少しだ…後少しで魔王の座は俺の物だあ…！』  
』



サ  
セ  
ル  
力。

不幸その十九 彼女はアレで頭が良いそうです。(後書き)

ども、読み終わっての感想はどうですか？

不満または感想があればいつでも聞きます！

それでは皆さん！次の更新までさらば！

ちなみに、モバゲの作者レイン焰花は私と同一人物です

機会があればそちらも読んで見て下さい。

それでは！またお会いしましょう！

不幸その二十 彼女にはもっと男に警戒して欲しいです。(前書き)

更新が毎回遅れてすみませんでした。

でもそろそろ更新がスムーズにできそうです。

では、今回のをどうぞ

不幸その二十 彼女にはもっと男に警戒して欲しいです。

起キ口…

誰だ？

起キ口、ソシテ敵ヲ殺セ。

敵？敵って誰だ？

決マツテイル。才前以外ノ、魔王ノ座ヲ狙ウ者ダ。

おい！お前一体何…

奪ワレルナ、魔王ヲ誰ニモ渡スナ。アノ女ハ、俺達ノ物ダ。俺達

以外ノ誰ノ物デハナイ！

「なっ！？」

ガバッ！ゴキン！

勢い良く体を起こす。そのせいで骨がなった。…微妙に痛い。

「イツテェ…！」

腰を片手で抑え、もう一方の手は額の汗を拭う。

「……なんだあの夢は…？」

いや、そもそも夢なのか？アレは何か夢とはまた違う何か…だと思っただが…

「何かが引つ掛かる。何か大切な事のような…」

と考え事をしている内に、頭が冴えてきて現状について頭がいく。

「……………」

なんだ、これは…？

「……う……ん……」

とロメアは横で硬直している俺の状態をよそに気持ち良さそうに

寝返りをうつ。

「……………」

目を離そうとしても離せない。そんな光景が今、目の前にある。

「……………」

ツー…

鼻から何か暑い液体が流れる。

そして久々に登場した息子が臨戦体勢に…

「だあー！させるかあー！」

やっと我に帰った俺は紅い指輪を慌てて指から抜いた。

……………

ゴキン！

「あべしっ！？」

戻って来たと思った瞬間、俺は背中に物凄い衝撃と痛みを感じた。  
冗談抜きで痛いんですけど！？

「イテテ…一体何で俺は痛い目に……………何つつべたな展開だよ

この野郎。」

ベッドから落ちるって、稀だぞ？天然記念物だぞ？…さすがにそこまでじゃないか。

「まあ、兎にも角にも！今はこの変な空気をどうにかしないと…」  
いつもと変わらない病室…だが何か変だ。何か空気というかそういう物が乱れている気がする…

「よいしょっと！」

勢い良く立ち上がり、病室のドアに歩いていく。

幸か不幸か、この乱れの中心が分かる。これなら迷わずにすむな…

「というか、俺はそこに行つてどうするつもりなんだ？」

ヘルミたいな奴がいるかもしれんのに…

「ま、だからといってこの乱れを治さない訳にもいかないしな。」  
ま、治し方も分からねえが、行きゃあ分かるだろ。

立ち止まって、顔を上げると既に目の前には屋上への扉が見えた。

「ま、どんな奴が来ても必ず勝つてやる。」

ボタン！

扉を勢い良く開け、屋上へと足を踏み入れる。

「…やっぱり、ここから乱れが生じているな…」

だったら一体、何が原因なんだ？

「よお？ 案外早くここに来れたな…さすが、次期魔王候補ってか？」

な…！

「どこに」

「ここだ！」

ヒュン！と風をきる音が頭上からし、咄嗟に横に跳んだ。

ズガガガガガガ！！！！

と、同時に何かが大量に突き刺さる音がした。

「…な…嘘だろ？」

じ、地面に鉄骨が刺さつとる！！！？しかもあり得ねえ程！！！！！！

「あゝあ、折角楽に死ねるチャンスだったのにな…」

そいつは、漆黒の髪を靡かせてそんなイカれた事を笑顔で言った。

「俺の名前はフルウ・レイン…一応悪魔で貴族だ。何故こんな事をするか？については…言わなくても分かるよな？」

ニタリと、顔を歪ませてそいつは笑う。

「そうだな、なら、俺も本気出して抵抗しても良いんだな？」

「お前、人間のくせに中々良い度胸じゃねえか。気に入った。お前は特別に喰い殺してやる。」

「遠慮すつぜ、テメエはその鉄骨でもかじっておけ。」

言うと同時に俺はフルウという悪魔に向かって走り出す。

「ほう！いきなり突っ込んで来るか、益々気に入った！」

「食らえ！」

フルウの懐に入ると、渾身の右ストレートを腹に決めた。

かのように見えた。

「なっ！？」

「弱いぜえ！！？」

ドゴンッ！！

「がはあっ！？」

動揺していた俺は、フルウの右脚による物凄い蹴りをモロに食らってしまった。

ドンッ！！！！

「がつ！！！！」

そして、俺はそのままコンクリートの壁に背中を強打した。

ヤベエ……いきなりピンチじゃねえか……！

「くそ……！」

「ククク、どうした？もう降参かあ！？」

嘲るような笑みと共に、フルウは右手を鳴らしている。

「畜生が……」

くそ、やべえなこりゃあ……死にそうだ。ここでコレは使いたくなかったんだが……なんせ、まだ上手く使いこなせねえからな。

「ククク、どした？もう諦めたのか？見たところ、悪魔に対抗する策を持たない人間みたいだからなあ！！」

フルウの勝利の雄叫びにも似た高笑いが響く。

「さあて、そろそろ死んでもらおうか？無力な人間！！」

バキィ！！！！

コンクリートを粉砕する一撃が、貫いた。

「グガアアッ！！！！？」

ベキベキキキボキミシミィ！！！！

内臓のあちこちが潰れる音に混じり、骨の悲鳴が聞こえる。

「があ……！！て、めええエエエエ！！！！！！」

「……」

「どうしてだ！？何故人間であるお前にこんな力が使える！？」

「使えるさ、悪魔。人間は、お前が思っているよりも全然強いんだよ。」

俺、五膳麗二は悪魔であるフルウに致命傷を与え、それを証明した。

「……く、……クク、ククハハハハハ！！！！」

「何がおかしい？」

「いや、ただお前の事がもっと好きになってね？」

「男からの求愛はお断りしています。」

だってそういう趣味がないんだもの。

「違う違う。そういう好きじゃない。ただ俺はお前という存在に求める物を見つけた。と言いたい訳だ。」

「ふ〜ん、そう。…あんまし理解出来ねえ…！」

「別に理解しなくてもいい。ただ、俺はお前を強いと認め、殺すのはやめるわけだ。」

「へえ、往生際が良いみたいだな。」

「だな。そろそろ俺は帰るとするよ。」

「帰れ帰れ。お前のせいで入院が長引いちまったんだからな。」

「…ふむ、お前入院してんのか？」

「そうだが？」

「ドンマイ。」

「ふざけるなあ…!!」

何だこの原因がああ…!!

「ククク、お前はやっぱり良い。褒美だ。怪我は全て治してやる。」

「え!？」

「我が友の為、我が血肉を削りて、我が友に生命の源を授けん。」

な、何を!？

「紅き血の祝福」

ジワア…

「な!？」

フルウが何かを唱えた瞬間、俺の体から何かが浸透するような感覚に襲われた。

「何だこれ!？どつたのこれ!？何したんのコレ!!?？」

かなり恐いんですけど!？

「ただの回復系の魔法だ。暫くすると怪我は完治するだろう。」

「そ、そうなのか?」

「俺は帰る。お前はこれから死に物狂いで生きろ。それが俺を倒した男の生き方だ。」

「お、おう。」

てかちょっと待て？アイツ内臓やら何やら砕きまくったはずだが？

「じゃあな、隻眼の魔王よ。」

「！！」

！こいつ、気付いて！？

「じゃあな…ククク…」

スウー……

別れを告げると、フルウの体が砂のように崩れて消えていった。  
まった。

「あいつ……………何気に親切だな。」

「そこか！？」

「！！誰だ！！！！？」

「私だ！！！！！」

いや…そんな堂々と言わないでくれないか？萌ちゃん。

「萌…いつから見てた？」

ここは何とか誤魔化さなければ！？

「お前がここに入る前から。」

「……………それってストーカーだよ萌ちゃん。」

「うるさい。単位1にすつぞ。」

それ職権乱用じゃね？

「とにかく、全て包み隠さず話せ。でなければ退学にすつぞ。」

「それって職権乱

「話すよな？」……………はい。」

……………どうしょ、俺……………（涙）

不幸その二十 彼女にはもっと男に警戒して欲しいです。（後書き）

今回の出来はどうでしたか？ダメだしなどがあれば是非してください。

それでは、またの機会にお会いしましょう

不幸その二十一 彼女達は頼れる繋がりです。(前書き)

更新不定期すみません…

不幸その二十一 彼女達は頼れる繋がりです。

ども、こんにちわ。前回派手に暴れ過ぎた為か萌ちゃんに全てバレてしまった麗二です

「誰が萌ちゃんだ、誰が！」

「細かい事は気にしないでねえ。」

「ぶつぞ。」

「すいません。」

瞬時に頭を下げる。

「まあそんな事はどうだっていい。それよりもお前の話が信じられんぞ？」

「なら忘れてくれ。」

「出来るか、あんなもんまともに見ちまったんだ。信じるしかないだろう。」

ですよね。

「だがお前が次期魔王だというのが一番信じられないのだな。」

あ？

「どういう意味だ萌ちゃん？」

「そういう意味だ。」

「だからどういう意味だ。」

「そういう意味だ。」

「だからどういう意味だって聞いてんだよ萌ちゃん？」

一撃必殺スマイルで萌に尋問するように聞く。

「！？お前何か恐くなってねえか！？」

「何の事かい？」

「ニ「ニ」」

「ヒイヒイヒイ！！！！？」

ズザザザザザザザザ！！！！

物凄い速さで後ずさる萌。

勿論顔は恐怖に引きつったままで。

「お、おい！これ以上近付くなよ！！！！？」

そんなに怯えないでよ…軽く傷つく。

「はあ…まあいいや。」

顔を必殺スマイルから切り替えて溜息を一つつく。

「問題はこれからについてだしなあ。」

「冗談抜きで面倒だ。」

「？どういう意味だ？」

復活した萌ちゃんが怪訝そうな顔で聞いてくる。

「だってさあ、またフルウみたいな奴が来たらどうするよ？かなりヤバイじゃん？」

「まあ、そうだが。」

「あゝあ、どうしよう…」

「なあ、もう一つ問題があるぞ？」

「ああ？何？」

「なんだよ、これ以上厄介事を増やさないでくれよ。頼むから。」

「来桜も俺と一緒に見てたんだが…」

「え？」

.....マジでか？

「來桜、入って来い！」

と萌ちゃんはドアに向かって言う。

ガー.....ガタン

そして現れたのは、制服姿の來桜。

「.....」

「.....」

「.....」

...沈黙の再来。

「じゃなくて！...來桜もいたんなら始めから出てこれば良かっただろっが！」

「...昨日」

「...そうだったな。そりゃあ会いづらいよな。」

「.....」

「.....」

「.....」

「  
…」

「  
…」

そしてまた沈も

「させるかぁ!!」

「何いつてんだお前？」

「  
…」

「黙ってくれ萌ちゃん。」

「誰が萌ちゃんだぁ!!?」

「  
…」

てか來桜さん?やっぱり無言ですか…

「話が進まんな。」

「誰のせいだ!？」

「お前だ!」

「そでした。」

ペロツと舌を出して可愛さアピールして言ってみる。

「「……………」」

……………

「ま、まあ！元気出せよ！な！？」

「いいいいいよ、俺には可愛さなんて無理な話だったんだ。」

ポン…

部屋の隅で体育座りをして床にのの字を書く俺の肩に、ポンと手が置かれる。

「大丈夫…一部の人は萌える…」

「「……………」」

……………喜んで良いのか？

「…ありがとう。」

さて、話を戻そう。

「まあ、俺が次期魔王候補という事は分かってるよな？そのせいで狙われているのも？」

「ああ、大体はな。」

「…知ってる」

「てか信じるの?」

「「見たから(…)」」

二人揃ってのお返事ありがとう

そしてこれからどうなるんだろうか…

「とまあ、無駄な思考はここまでにしてっ」と…」

少し深呼吸をし、息を整える。

「知ったんなら、この事は誰にも言わないでほしい。」

「それは当然だろうが?」

「…当然」

うん、一つ目はOKだな…よし、次は。

「…俺に近付かないでほしい。」

「え?」

「…」

驚きが隠せない。という顔をする二人。

まあ当然か。

「俺はいろんな奴に命を狙われている。これは間違いない。だから…」

「だからなんだ。」

萌ちゃんの怒気を含んだ声が遮る。

「だからなんだ。って…」

「俺はそんな理由でその願いを聞き入れたくはない。」

「そんな理由って…」

「この気持ちは来桜も一緒の筈だ。」

「…一緒」

「萌ちゃん…来桜…」

「だからさ、俺達に迷惑かけるとか、そんな理由で繋がりを断ち切るもんじゃない。」

「…繋がり、か…」

「それに、繋がりには簡単に断ち切る事も出来ないしな…」

確かに、そう簡単に断ち切る事も、切られる事も無い。

「萌ちゃん、なんか先生みたいに良い事を言った…」

ゴン！！

「だっ！？」

何故か萌ちゃんのゲンコツが俺の頭にクリーンヒット。痛え…

「俺はこれでも教師だよ、この野郎。」

「そでした。」

うん。マジで今思い出しました。

「あー、いて…」

絶対タンコブ出来たよこの痛みは。

「…でもまあ、アレだ。萌ちゃんと來桜の話は理解した。うん。悪かった。自分一人で抱え込んで結論出して…」

「分かりやあ良いんだよ。」

「おかげで決心が出来た。」

「ほう？どんな決心がだ？」

聞いて驚くなよ萌ちゃん？

「それは…」

「それは…?」

「…?」

萌ちゃんと來桜の意識が集中するのを感じる。

よし、言つてやる!

「明日考える。」

「…」

「…」

「…」

ゴン!!

「いだっ!?!」

ドカツ!

「げはあっ!?!?」

ドガッ!

「いだっ!?!ちよっ!?!無表情で殴らないでくれないか!?!」

「うつせえ、散々人に期待さしといてなんだあ?明日考えるだと?」

ふざけるのも大概にしるや。」

そう言いながらも無表情で拳を振り上げる萌ちゃん。

「だからっ！俺はこんな大事な事を短時間で決めたくないだけだっ  
てば！！？」

ピト…

突然萌ちゃんの攻撃が止む。

「…はあ、そういう考えならそうと先に言えば良かっただろうが。  
それをわざわざ誤解されるような言い方をしやがって、この馬鹿が。」

「…あゝ、すまんね。」

「ふん、今日のところは早めに帰るぞ、來桜。こいつにちゃんと考  
えさせてやらんといけんしな。」

「…分かった」

ゴ…

「じゃあな麗二。明日までには考えておかないと殴るからな。」

脅しかよ。

「…バイバイ」

うん、來桜は普通だな。

「明日には考えるさ、だから二人とも、明日も来てくれな。」

「当たり前だ。」

「…当然」

「はは…じゃあな。」

「といっても同じ病院内なんだけどな。」

「…」

ゴト…

萌ちゃん達が出ていってから、少し経って静かに扉がしまった。

さて…そろそろ良いかな。

「グ…!!」

チツ、さつきより頭痛が酷くなってやがる。

萌ちゃん達と話始めてから、頭痛がして、そして今は頭が割れんばかりの痛みを発しやがる。

ビキイ…

「グアア!？」

真実ヲ、見セテヤル。

また、あの…声が、聞こえ…

そして、俺の意識は闇に墜ちた。

不幸その二十二 彼女は久しぶりに会ってもガラスのハート。(前書き)

ども、お久しぶりです。レイン氷花です。

何となく最近、キャラの人氣が知りたくなりました。

ですんで、キャラの人氣投票をする事にしました！

期間は今日から11月の半ばまで。

投票の仕方は簡単！キャラの名前（だけでも良い）を書くだけ！  
因みに一人だけ。

それと感想の方で出してください。

沢山の票をお待ちしております！

以上！

不幸その二十二 彼女は久しぶりに会ってもガラスのハート。

「オイ、起キ口。」

聞き慣れた声が上がらする。

「オイ、意識ハ既ニ戻ッテイルダロウガ。」

誰だろう…？聞き慣れた声で、いつも傍で聞いている筈の声なのに、誰か分からない…

「チツ、奥ノ手ヲ使ウカ…」

ん？何か嫌な予感が…

「机ノ、二番目ノヒキダシに入ッテイル、バイb」

「ダーーーーー！！！！！！？」

何を言おうとしてやがる！？

慌てて声を遮り、一瞬で起き上がる。

「ヤット起キタカ。」

上から声がまた聞こえる。

そして俺は慌てて上を向き、驚愕した。

「な……」

「ククク…ナンド、ソノ化ケ物デモ見ルヨウナ目ハ？」

声の主、そいつはその見慣れた口の端を歪めて笑う。

「アア、ソウ言エバ、コウシテ会ウノハ初メテダッタナ…」

「お、お前は…！？」

「…俺ハ、十二ノ王ノ一人ニシテ、幻ヲ統ベル王、五膳麗二。」

と、そいつは、五膳麗二という人間の形をしたそいつは、俺が知らない事をペラペラと喋った。

「何を言つて…！？」

「才前ハ、誰ダ？」

「はあ！？俺は五膳麗二だ！？お前と同じ…名、前…？」

俺ノ名前ハ、これか？

アレ？待て…なんだ…！？

「気付イタカ？違和感ノ正体、矛盾二。」

「待て、待て待て待て待て…！何で！？」

どうして俺は、自分の名前を疑問に思った？

「才前ハ、ソノ疑問ノ答ヲ知ル事ハ出来ナイ。」

どうして俺は、こいつが正しいと思った？

「何故ナラ、才前ハ所詮偽物ダカラダ。」

「どういう…」

「ソノママノ意味ダ。」

「意味が分からない…」

「イズレ分カル。」

ピシッ！

あいつの体にヒビが…！？

「フム、ソロソロ時間力…」

「時間？」

「ジャアナ、偽リノ器。」

「おい待て…！お前にはまだ聞きたい事が…」

ビシッ！！

必死に止めようとするが、ヒビはだんだんと広がり続け、やがて視界がそのヒビに覆われて闇が広がった。

「なんなんだよ、一体どうなってやがるってんだよ！！答えろ！！  
自称五膳麗二！！！！」

闇に覆われた空間に、俺の声だけが空しく響く。

「…知リタケレバ、進メ、タダタダ進メ。何故ナラ、ソノ先ニ在ル死ニヨツテシカ、才前ノ答ハ見ツカラナイカラダ。

そいつの声が、今度は俺の頭に直接聞こえる。

「…次、マタ俺ニ才前ガ会エルノハ、才前ガ消滅スル瞬間ダト覺エテオクンダナ…」

ブッン…

頭の中で、何かが焼き切れたような気がした。

シャリ、シャリ…

「目覚めましたか？」

「…？」

体を起こし、横を見るとピンクの髪があつた。

「もしかして、暫く会ってなかったから、私の事忘れたと言わな  
いですね？」

「あんた誰？」

「…ひつ、ぐう…うう………」

「ゴメンゴメン　しっかり覚えてるぞ、メア。」

久々に頭を撫でてみる。なんか懐かしい。

「…ぐずっ…酷いです。」

「はは…久しぶりだから、ついイジメたくなっちゃってな。」

「うう…麗二はSです。サディストです。鬼畜です。」

「はは…」

否定はしない。何故なら、自覚しているから。

「でも魔王はMです。ドMです。雌豚です。相性抜群です。」

あー、やっぱりそうか。そうなのか。でもメアよ、三番目のは違  
うと思うぞ。

「ドSとドM。そこから導かれる答えは一つ！首輪プレへぶっ！？」

そこから先を言う事を、脳天チョップを食らわす事によって阻止。

「まさかの調教ぶぶっ！？」

「やめい。」

…したいけどさ。

「変態。」

「うおっ！？また口に出してたか俺！？」

「顔に出てました。」

「うええい。」

なんてこつたい。

「まあいいです。魔王様も似たようなものですから。」

そうなのか！？

「というか麗二より上です。」

…ロメアよ、お前は一体何にたどり着こうとしている。

「と、そんな事より麗二。」

「ん？」

「リンゴ剥いたから、食べて。」

ニコツと天使のような笑顔でメアは言うと、爪楊枝に刺したリンゴを俺の顔の近くまで持ってくる。

「ああ、ありがと。」

と俺はメアの手から爪楊枝を取ろうとするが、俺の手は空を切った。

「へ？」

「こつゆう場合は普通、女の子に食べさせてもらうのがすじつてもんでしょ。」

なんだそれは。初耳だぞ。

「はい、アーン」

「一人で食えるから良いって。」

それに恥ずかしいし。

「うう…」

「分かりました。全力で食べさせてもらいます。」

卑怯だ。涙卑怯だこんちくしょー。

「はい アーン」

「アーン。」

相変わらず切り替わるの早えー。

「ん。」

モグモグ…

「あ、そう言えば…」

「なんだ？」

「魔王様が大切なお話があるから、すぐ来るように。だって。」

「へえ…アイツが、ね〜。」

何を企んでるんだ？

「まあいつか。とりあえず、今行きやあ良いんだろ？」

「はいです」

花瓶の横に置いてある紅い指輪を手取る。

「んじゃ、行つて来る。」

「いつてらっしやい」

そして、紅い指輪を指にはめた。

不幸その二十二 彼女は久しぶりに会ってもガラスのハート。(後書き)

また読んでくれてうれしいです

不幸その二十三 彼女のために生きたいと思いました。(前書き)

ども、お久しぶりです！

最近腰がいたい十代の作者レイン氷花です！

いつもいつも更新が遅くてすみません！

と唐突に改めて謝ってみました。

では本文へ

不幸その二十三 彼女のために生きたいと思いました。

「ふう……」

………

見慣れた寝室につき、いつも何か言ってくるロメアがいないのに  
気付き、辺りを見回す。

「……おい、ロメア……？」

「……こっちだよ、麗二。」

いつもよりかなり低いトーンのロメアの声が、すぐ後ろから聞こえる。

「あ？」

「行く。ベッドに。」

「ああ。」

何回も言つが嫌らしい意味は無い。ベッドに座るだけだから。

トスン……

⌈  
⋮  
⌋

⌈  
:  
⌋

⌈  
:  
⌋

⌈  
:  
⌋

⌈  
:  
⌋

⌈  
:  
⌋

⌈  
:  
⌋

何、この沈黙？

⌈  
:  
⌋

⌋  
:  
⌋

⋮

⋮

⋮

⋮

⋮

「……………イラッ」

「……………」

「……………おい、何か喋ってくれ。」

隣りに座ってんのにとてつもなく距離を感じるのは俺だけ？

「…麗二は…」

「ん？」

「…麗二は、あの世界が好き？」

「？どういう意味？」

「優しい姉がいて、先生がいて、友達がいる世界の事。」

「……………ああ、大好きだ。」

「そか。」

「なんでまた…そんな事を聞くんだ？」

ロメアの顔にかかる影が濃くなる。

「…魔王になるためにはね、住んでいた世界、人である生活を捨てなければならぬから…」

「な……」

そうなのか!?

「それに、五膳麗二という『人間』をこの世から消し、『悪魔』の、『魔王』五膳麗二になる事も、魔王となる為には必要な事。…言い換えれば、絶対に避けられない道。」

「…なんでそんな事を黙ってた?」

てゆうかこの世から消すって…まさか一度死なんといけんのか?

「…」

「…まさか、俺がそんな理由で逃げるとでも?」

「……………」

はあ…俺はそんなヘタレに見られてたのか…何かショック。

「…はあ……」

「……」

また沈黙か?沈黙なのか?沈黙に入らなければならないのか?

「…そんなのさせるかああ!!!!!!」

「!?!?れっ、麗二!?!?」

「あ…いや、こつちの話。」

またやつちまった…

「えー…と…」

「はは…」

あー、ロメアがちょっとひいているような気がする。だが今はそんなのは置いておこう。立ち直れなくなるから。

「…まあ、その、なんだ？」

「うん…」

「…とりあえず、心は変わらないから。」

「え…？」

「心は変わらない。例えどんな困難、問題にぶつかったとしても、変わらないから。」

（僕は一生ロメアちゃんを好きでいる！）

！なんだ…この、声は！？

（たとえどんな不幸に襲われても、僕の気持ちは変わらない！）

…誰だよ…こいつ…！

（約束だよ、ずーっとずっと。もしロメアちゃんが忘れても、僕は絶対覚えてるから。）

なんだ…この、記憶を…頭ん中を焼き切るような声は…！！

何故こうも鮮明に聞こえやがる！！？

「麗二？」

ロメアの心配そうな声が聞こえる。

「！……………いや、すまん。ちょっと気分が悪かったただけだ。」

声が、止んだ…

「なら良いんだけど…」

安堵したように弱く笑みを浮かべる。

「…なんか、話がつやむやになったな。」

「誰のせい？」

「俺っすね。」

任意でやったわけではないんだがな。

「はぁ…」

唐突に、ロメアは溜息をついて呆れたように俺を見る。

「何かもう、麗二に隠し事するのもバカバカしくなったな。」

「…なんでだ？」

「それは、ねっ！」

ドンッ！

「かはっ！？」

突然、ロメアにベッドに押し倒される。

ていうか腹に頭突きをしないでくれ。普通に痛いから。

「それはね…」

ロメアが俺の上に乗る、四つん這いになって上から見下ろす。

「麗二の心が、想いが強過ぎるからだよ。」

ロメアの顔がだんたん迫ってくる。

「どんなに不幸になっても変わらない気持ち、どんな困難にも立ち向かえる気持ち、どれだけの危険をおかしても貫く気持ち…」

とうとうロメアの唇が俺のに触れ、そしてすぐに離れる。

「それが、隠し事をしている私が、よりいっそう弱く卑怯に感じる。」

ニコ…と優しく微笑むと、また唇を触れさせる。

キス魔か？

「麗二は気持ちを全て出しきっているのに、私はまだどこかで怯えて自分を抑えている。」

そしてまた唇を落とし、また離す。

「そんなのは嫌だ。こんな関係なんて嫌だ。」

そしてまた唇を合わしすぐ離れる。

「私も、魔王とかそんなの無しにして…」

また唇が触れる。だが今度はすぐに離れず、触れたままのキスが数秒続いた。

「一人の女の子として、麗二といたい。笑いたい。本当に幸せになりたい。」

「ロメア…」

「…でもね、無理なんだ。」

「え？どうして」

「魔王とは、その名の通り、魔を統べる王。」

「それがどうしたんだ？」

「魔王といえど、王には変わりない。そして王とは、何時いかなる時も、王として在らなければならない。」

「…」

「だから…王として、これ以上は駄目なんだ。」

王として…か。

「…じゃあ、お前が王じゃなくなれば良いんだな？」

「えっ？」

「つまりだ。俺が魔王になれば、お前は女の子として接する事が出来るんだろ？」

「…まあ、一応は…」

「よし、じゃあそれで。」

「え？え？」

「約束だ。破ったら覚悟しとけよ。」

「無理矢理！？」

「反論は認めん。」

「酷！！？」

「で、話は終わりか？」

「勝手に話を進めないで〜!？」

「ふむ、ロメアで遊ぶのは飽きたからやめるか。」

「止めないで!!」

…ドM全開だな。

「…もう、話は終わりか？」

気をとりなおして、真剣に聞いてみる。

「ううん、まだあるよ。」

「何についてだ？」

「私達の婚礼の儀式について、だよ」

婚礼の儀式…? …… 婚礼、つまり結婚、熱愛、合体、子宝…

「…早すぎね？」

「何が? 歳の事なら気にしなくてもいいよ。こっちの世界じゃ、15才から結婚出来るもの。」

「へー。」

つまり、望めばすぐにGOAL IN出来る訳だ。

「それで、どうしようか？」

「ふむ。」

…早めにしたほうが良いか…でも、まだ人間としての生活に未練があるのも確かだしな。

「一カ月後くらいが良いんじゃないか？」

最低だな、俺。

「…一カ月後、か…」

む、と少し考えて、ロメアがおもむろに唇を落としてキスをする。

「ん…じゃ、決まりね」

そして唇を離し、満面の笑顔でロメアは言った。

「準備は全て私のほうでやるからね。」

「おう、ありがとな。」

「じゃあ、お別れの前に一度、ちゃんとキスを…」

「ん…」

また、ロメアと唇を合わせる。だが今度はロメアも俺も、お互いに抱き締めあいながら。

「ん……っ……」

合わせた唇の間から、漏れた声を隠すように、お互いの唇を塞ぎあう。

「……」

唇を重ね合いながら、俺は心の隅で、こう思えた。

いつまでもロメアと一緒に、こんなふうに話して、こんなふうにキスをして。

出来たらいいな……

と。

だから、

俺は生きようと思った。

強く、強く……強く……

不幸その二十三 彼女のために生きたいと思いました。（後書き）

最後に、人気投票についてなんですが、期間を伸ばす事にしました。

何故なら、全く票が無かったのですから…（；；）

とまあ湿っぽいゴミ箱に捨てるとしてっと、早速期限について言っちゃいます

期間は第四十話まで、とかなり長い期間をとります。

ではでは ここまで読んでくださった読者方々、またいつか会いしましょう

琥春「さらばだ。」

！？何勝手に出て来てんの！？

琥春「ついノリで。」

いやいや、折角綺麗に終わりそうだったのに。あんたって子は。

「なら強制的に終わらせるまでだ。」

どうやって!?

「おようなら。以上!」

.....

不幸その二十四 彼女はとてつもなくエロいです。（前書き）

ども、こんばんわ！レイン氷花です！

最近小説の書き方が変わったかなーと思ったりしてるけど全然変わってない作者たる私です。

が、楽しんでくれたら本望です

不幸その二十四 彼女はとてつもなくエロいです。

「なるほどー、確かに完治してるねー。」

妙に間延びした声の主が、俺の右腕を診察しながら首をかしげる。

「まー、良いかなー。」

良いんだ!?

「腕に違和感でもあるー? 麗二君ー。」

クイツと眼鏡を直し、その眠たそうな視線を俺に向ける。

「大丈夫です。」

因みに、今話をしているのは外科医の清水透<sup>シミズ トウカ</sup>さん。美花の従姉妹らしい。

「なら今日で退院だねー。」

「そうですね。」

更に一つ言うと、かなり美人だ。

透菜さんの容姿は、膝まで届く薄い茶髪に濃い茶色のタレ目、レンズの丸い眼鏡が良く似合い、顔もスタイルがかなり良い。

「じゃー、退院する前にー、一度検査しましょうねー」

ゾクッ…！

「！？」

なんだ今の悪寒は…？

パサッ…

「ん？」

顔を上げ、正面を見て俺は、声にならない悲鳴を上げた。否、上げざるをえなかった。

「うわあああああ！！？何で服を脱いでるんですかあ！！？」

だって、透梨さんが服を脱いでたんですよ？しかもなんか既に下着と白衣だけしか着てないし。

「何でってー、そんなのー、決まっているでしょー？」

さっきまでの美人でおだやかな顔が、今では獲物を目の前にした飢えた肉食動物のような獰猛で歪んだ表情を映しだしている。

「検査にー、決まっているじゃないー？」

ニタァ…と熱に浮かされたように笑みを浮かべて言う。

イヤイヤイヤ。何を検査するんすか、透栞さん。

「ちゃんとー、右腕が動くかー、私を確かめてくださいねー？」

何を！？右腕であなただの何を確かめるんですか！！？

ポフ…

ブラジャーが落ち、透栞さんの胸があらわになる。

「！！？なな何を！！？」

ヤバい。馬鹿姉やヘルとは違った肌の…じゃなくて！！

「ちょっと待ってくれ透栞さんっ！！」

「んー、何ー？」

良かった…透栞さんにまだ理性があっ…

スル…

「うわー！？わー！！！！？ちよっ！透栞さん！！？」

最後の砦というか何と云うか、一番危ない場所、もとい下の部分を隠していた布きれがいつも簡単に脱がれた。

「何ー？私に構わないでー、話を続けてー。」

イヤイヤイヤイヤ。構わないでって、無理だから。というか透栞さん。あんたもしかや俺と合体をする気じゃないだろうっなあ!?

「イヤイヤ、透栞さん。あなたは一体を何をする気なんですか?」

とりあえず今は一時的にでも冷静に…

「言っただじゃないー? 検査だってー?」

「いやいやいや、何の検査って言うんですか!?!」

ヤバいな。透栞さんが直視できない。

てか白衣に全裸って…またなんでマニアックな趣味に目覚めそんな格好してんの?

「男の子としてのー、役割をー、果たせるかー、確かめるんですよー」

役割って……それって絶対アレだよな?

「拒否します。」

「そう言いながらー、元気になってるのはー、何ー?」

指差す先は、俺の下半身。…まさか…

「……!」

恐る恐る見た先には、我が股間の紳士が臨戦態勢に入っていたのが見えた。

「……………」

…我が股間の紳士よ、素直なのは良い事だが、時と場合という物を選べこんちくしょう。

「ではー、遠慮なくー、いつきまーすー！」

ゴンー！！

「痛ー！ー！？」

ドサツ…！

飛び掛かってくる透栞さんを見て、俺がもう駄目だ。と目をつぶった瞬間、鈍い音が前方から聞こえ、続いて何かが倒れた音がする。

「な…」

それを不思議に思った俺が目を開くと、そこには仰向けに大の字で倒れている透栞さんがいた。

そして横には可愛い男の子が。

「清水…？」

「久しぶりだね、麗二君 大丈夫だった？」

「大丈夫だが、透栞さんを気絶させたのはお前か？」

気絶してる透栞さんを見る。そしてすぐ逸らした。何故かって？透栞さんの足はこつち向いてんだぞ？しかも大の字なんだぞ？足の間からパツクリ開いてこんにちわなんだぞ？……………

……何言ってるんだろ俺。

「そつだよ」

何その満面の笑み。

「……でもまさか麗二くんにまで手を出そうとするとは僕思ってたよ、ごめんね？」

「いや、お前は何も悪い事してないんだし。謝る事ないぞ。」

「そつ？ありがとうね、麗二君」

いや、正確には透栞さんを気絶させた事が悪い事なのか？

「とりあえず、この発情期の雌猫は僕が片付けるから、麗二君は今すぐにでも帰っていいよ」

酷い言われようだな、透栞さん。てか常習犯？

「あー、確かに。今帰ったほうが良いと体中が叫んでるしな。」

「叫んでるんだ……」

「じゃ、明日学校でな。」

「うん。明日学校で」

…そういや馬鹿姉とヘル、メアは家でどうしてるんだろうか…

「…ま、さつさと帰りや分かったろ。」

と諦めて家に向かって歩きだした。

来ルゾ、『運命』ガ。

え？

不幸その二十四 彼女はとてつもなくエロいです。(後書き)

ではさよなら。

メア「待てよ！」

ん？

メア「なんだその出番が初めと終わりしかない可哀相なヒロインを見る目は……！」

いや、読者が性格や設定を忘れてるキャラを哀れみのまなざしで見てるだけだが？

メア「……ひつぐ、うぐ……っ……うう……」

いやいや、何も凶星を突かれたからって泣かなくても……

メア「天翔ける汝は閃光！」

え？それって魔法？本編ではヘルとフルウしか使ってない魔法ですか？

メア「我が魂に誓いて従え！」

いやいやいやいや、思いつきしネタバレ行為でしょうが、それは。

「貫け！——エクセスホーン角獣王……！」

ドガアアアン!!!!!!

ぐはぁ……!!作者なのにこの仕打ち……

作者は力尽きた。

ちーん

終わり

不幸その二十五 彼女は精神年齢が俺より上だと思っています。(前書き)

ども、こんちわー！(？)

なんか最近急に執筆意欲がみなぎってる作者レイン氷花です！

最近麗二の性格が只の変態になっちゃってるようにしか思えませ  
ん。

でもそのほうがコメディーとしては良いと思います。…人として  
どうかと思いますが。

では、本編どうぞ

不幸その二十五 彼女は精神年齢が俺より上だと思いません。

来ルゾ、『運命』ガ。

え？

「お前まだいたのか！？」

今確かにあいつの声が！？

ウルサイ。

なっ！

今ハソンナ事ヲ考エル時デハナイ。

「？どういう事だ？」

前ヲ見テミロ。

「ん？小学生の女の子が一人いるがどうかしたか？」

馬鹿ガ、ソイツナンダヨ。

「？回りくどくてわけ分かんねえんだが…」

…トリアエズ注意シロ。

「だから何に!?!」

コッ…

「!?!? うおっ! いつの間に!?!」

靴音に反応し前を向くと、さっきまで10m近く離れていた筈の女の子が、目と鼻の先にいた。

「ククク そんなに驚かないでも良いじゃないか」

「驚くだろ! 普通は!」

才前ハ普通ジャナイダロウ。

「ほっとけ!?! て、あ…」

「ククク 仲が良さそうで何よりだよ。」

「どこが!?!?!」

……………あれ?

「…おい…お前、分かるのか?」

「ククク」

…ヤバイ。なんか知らんがこの女の子ヤバイ。さっきまで気が付

かなかつたけどこいつ…

「何を怯えてるんだい？」

「！！？」

心を読んでやがる！

「ククク」

「…」

悪魔か…それとも、新手か…？

…どっちにしろ、使わなきゃ死ぬ…！

「…自分自身に対して術をかけたね？」

！俺の手の内は既にバレてるか…

「それも、自身の身体能力を上げるタイプの物を。」

「お前は一体、何だ？」

そこまで見破ったのか！？

「ククク、分からないかい？」

そこで女の子は笑うのを止め、その少しつり上がった目で俺の目を真直ぐに見据えて、言った。

「君と同じような存在だよ、五膳麗二の偽物くん。」

「!?!?どういう意味d」

チュウ…

おい…なんだこの唇に感じる温かさは。

「…クク、キスだけど何か？」

「!?!?なななななんで?!?!?」

「理由が分からない? まあ、当然だろうね」

当たり前だ!!

「別に理由は今分からなくても良いんだ 分かる必要も利益も無いからね」

女の子はそう言って顔を離す。

「…てかお前って…」

「ああ、そう言えば自己紹介をしていなかったね。」

今更か。

「僕は坂井 涼。<sup>サカイ リョウ</sup> 近所の小学校に通ってはいるけど、会ったのはこれが最初で最後だよ。」

なんだよそれ…

「言ってるじゃないか、僕と会えるのはこれっきりって事だよ。」

「随分自信たっぷりだな。」

「僕は先が分かってるからね。」

「？はい？」

「？先が分かってる？それって未来予知…」

「とは違うね、僕のは未来を知るわけじゃない。」

「じゃあなんだ。」

「知りたいかい？」

「もったいぶるなよ。」

「クク、それが知りたいなら条件がある。」

「あ？」

条件付きだよ。

「僕に色々と（性的に）体に教えこんでくれたら良いよ。」

「何言ってるんだお前は。」

小学生の分際で…てかこいつ小学生なんだよな。タメで話してるけど。

「冗談だよ。」

なら言っな。危うく間違いを犯しそうになったただろうが。

「小学生もOK？守備範囲が広いんだね。」

「心を読むな。」

「しかもマニアックな。」

言っな！てゆうかその前に心を読むな！！

「ふむふむ…首輪プレイがお好みか。」

「言っなっつたよなあぁ！！！！！！？」

何俺の性癖ばらしてやがるコラァ！！！！

「何？手錠も可なのか？」

「うわああああ！！！！こいつ苦手だああ！！！！！！」

因みに、この叫びはご近所の人々にも聞こえ、かなり迷惑だったとか。

「結論で言うと、結構Sなんだね（性的な意味で）」

「もう、嫌だ…」

てゆうかこいつが嫌だ。

「あ。もうこんな時間か…」

「ん？」

点滅している携帯の画面を見ながら、涼が呟く。

「名残惜しいけど、僕は門限に間に合わなくからもう失礼するよ。」

「そうかいそうかい。」

「おや？悲しくないのかい？」

「というかやつと安心出来るし。」

「ククク、つれないねえ？あんなに楽しく喋りあったじゃないか。」

「お前がな！！？」

「本当ならもつと時間がある時に話したいものだけど…残念かな。もう会う事は無いから悲しいね。」

「…そんなに俺と話せて楽しかったのかよ。」

「勿論。出来るならセ〇レになりたいくらいだよ。」

「いやいや、お前ほんとに小学生か？」

「一応ね。」

「一応かよ。」

「だから小学生は門限を守らなくちゃいけないんだ。」

「不便だな。」

「まあね。」

「……………というか帰らなくていいのか？」

「ああ…忘れてたよ。さようなら、五膳麗二の偽物くん。」

「偽物ゆづな、涼。」

「ククク、また会ったら考えるさ。」

「絶対会ってやるよ。」

「…期待しないで待っておくよー！」

振り返らずに手を振る涼の後ろ姿を見ながら、俺も小さく手を振った。

「あれ？結局涼は何の為に俺に会いに来たんだ？」

…今頃力、才前八。

「なあ、お前は分かるか？」

知ラン。ダガ、『運命』ハ気マグレダカラ、気マグレデ何モセズ  
ニ帰ッタンダロウ。

「なんだそりゃ。」

モシ、『運命』ガ本気デ才前ト戦ウツモリダッタナラ…

「だったならなんだよ。」

コチラニ勝目ハ無カッタ。ソレドコロカ、相手ニモナラナカッタ  
ダロウ。

「マジかよ。あんな小さな女の子がそんなにか？」

姿形等関係無イ。重要ナノハソノ能力ダ。

「ふーん、意味分かんねえ…」

話ニナランナ。

「そりゃ失礼した〜。」

俺ハ休ム。コントナラー人デヤレ。

「ひでえなデメエ。人の頭ん中にくせして。」

勝手ニヤツテイロ…

「おい、なんだその物凄く投げやりな言い方は？」

…

「おい、どうした？」

…

「おい、生きてますか〜？」

…

「……………」

…

「…帰ろ。」

視界が歪んでるけど気にせず進んでやる！別に泣いてなんてないんだからっ！

…

「…ツンデレは、やっぱり金髪だな…」

いや、金髪以外でもいけるんだが。

と少々タイ事を考えながら、俺は帰路についた。

不幸その二十五 彼女は精神年齢が俺より上だと思っています。(後書き)

ここまで読んでくださった読者方にはありがとうございます

さて、ここでは主にちょっとした小ネタと重要な報告について語りたいと思います

まず、投票は一応四十話まで継続します。

以上。

ロメア「報告少なっ!?!」

だってないんだもの。

ロメア「なら私と語り合おうよ!」

何を?

ロメア「勿論、夜のテク」

ではさようならー!

ロメア「勝手に終わらさないでー!」

終  
わ  
り

不幸その二十六 彼女は記憶が戻りました。（前書き）

今回は長いです。しかも駄文レベルも比べ物にならないです。物語を書く資格が自分にあるのか無いのか書いている間思っていました。

さて、長つたらしい前置きはさておき、本編へ早速行くとしまし  
よう!!

ヘル編スタート!!（続きません）

不幸その二十六 彼女は記憶が戻りました。

ドガアアアン！！！！！！

「！風絶陣！！」

ヘルが叫び、薄い緑色の膜がヘルを中心に展開。

迫って来た光の柱を防ぐ。

「……」

……何だこれは。

久々に帰って来たというのに、どういう有様ですかコラ。

「麗二！今来ちゃ危ないからどっか隠れてて！」

うん、言われなくても。……だがその前に聞きたい。

「なんでお前達が戦ってんだよコラー！！？」

しかもお前ら、非現実的な力を使っているせいか被害が大きいんだが……主に俺の家が。

「ゴメン麗二！今は理由を話せないけど何とかするから！！」

何とかするって言っても…もう手遅れな気がするんだが、家の損壊状態が。

ガキイン！！

「退いてください！」

ヘルがいつかの変な形の刀で斬りかかってくる。

「嫌です！」

それをメアが細い剣でガードする。

「私の仕事は五膳麗二を消す事です！だから邪魔をしないで下さい  
！！」

ガギィ！

変な形の刀を一瞬引き、メアの懐を通ってヘルが俺に向かって再び斬りかかる。

「終わりです！」

刃が俺の首を狙ってくるが、俺はそれを難無く後ろに跳んでかわす。

「記憶が戻ったのか？」

という事は俺の術はほぼ完全に解けたか…

「そうですよ。」

再び変な形の刀を構えなおす。

「ふむ、だが良いのか？」

「何がですか？」

「俺の術が解けたのは分かったが、お前は一つ忘れてないか？」

「？何を……あ……」

「よし気付いたか。」

ヘル顔があの時とは比べ物にならないくらい赤く染まっていく。

「な……な……あ、うああ……う嘘……」

呂律が回らない程か？

「いや、残念ながら本当だ。」

そう言う、この世の終わりのような顔をするヘル。

いや、まあ……裸を見られて、その上食事や排泄といった世話をし  
てもらったからって嫁にいけない訳じゃ……いや、いけないかも  
しれないかもしれない……

ガガーン！！

と聞こえそうな程に更に絶望に染まるヘル。……なんで？

「声に出てました。」

え？メアそれは真か？

「本当です。」

という事は…

「…仕事なんかもう関係ありません。絶対に抹消します。」

やっぱりか（TOT）！

「てかまた俺の術を食らったら、あの失態の二の舞だぞ？」

「…大丈夫です。その対策はもう既に考えました。」

ほう？是非聞きたいもんだな。

「じゃあ、俺から行くぞ！」

とりあえず気絶させんのが先だな。

「！」

これで気絶した筈…

「無駄ですよ。」

「な…！」

何でだ!?

「何故かお分かりにならないようですね?」

「当たり前だ。」

「なら良かったです。」

良くねえやい。

「ですが、あなたの唯一の戦う術は私には通用しなくなりました。」

だな。てか軽くピーンチ

「次は私の番ですね。」

といって向かって来るヘル。

「。。」

「無駄ですよ!!!」

変な形の刀を振りかぶるヘル。だが、お前は勘違いしているぞ?

「終わり、です!!!!」

パキイン!!

次の瞬間、何かが折れる音が響いた。

「！？なんで…！」

次いで、ヘルの動揺した声が聞こえる。

「あなたは普通の人間の筈！なのになんで私の刃をへし折ったの！  
？しかも一度ならず二度目までも…！」

「簡単な事だ。相手に俺の技が効かないのなら、相手では無く自分  
自身に使用すれば良いだけのこつた。」

「そんな、事が…？」

「ああ、それと。俺が今自分にやったのは、筋肉に作用するもんで  
な？身体能力を普段の五倍から八倍くらいまで無理矢理上げるも  
んだ。」

「そんな事をしたら、人間の体は、いとも簡単に壊れちゃうん  
ですよ？」

「知ってる。だがそれでもしなきゃならん立場だからな。」

「あなたは…本当に魔王を愛しているんですね…」

「さあな。…だが、大好きだ。」

「…気が変わりました。」

「ん？」

今なんと？

「気が変わったと言ったんです。」

「何故？」

「…あなたを殺すのは、私の美学に反しますからね。」

「いやいや、意味分かんねえんだが？」

「ですが、私も仕事を途中で投げだす事はしたくありません。」

「あの、話がさっきから見えないのですが？」

「…ですから、条件をだします。」

「無視ですか、スルーですか。」

「条件？」

「はい。その条件を満たす事が出来たなら、私はあなたを殺すのを諦めます。」

「へえ、見逃してくれるのか。」

「はい。」

「何かやけにあっさり諦めるんだな。」

「ですがその条件を満たさなければ無理ですよ？」

「うええい。」

めんどくせー。だがこれでヘルから命を狙われなくなるのは良いな。

「で、その条件は？」

「簡単な事です。あなたが私が放つ、魔法による全力の一撃を受け止めるだけですよ。」

…今なんと？

「魔法で…」

あの、さっき連発してた意味分かんねえ爆発とか光線とかの事だよ。……………イヤイヤイヤイヤ、どっからどう見ても身体を強化しただけで防げねえから。良くてバラバラ死体とかなる。

「いきますよ。」

「イヤイヤイヤイヤ、まだ心の準備が…」

「風よ、大気よ、刹那の時にて集え、」

無視ですかあああああー！！！！！！！！

「我が言霊を刃に、斬り裂き、刻め、」

…！！」

なんか空気の流れがおかしい？

「破壊と殺戮の果てに、死者の名を刻もう！！」

ヘルの周りの空気に、緑色の光が飛び交う。

なんだ、これは？なんだ、この感じは…！？

「風属性、最上級魔法…」

と、右に100mくらい離れていたメアが呟いた。

「…信じてます、麗二さん。」

そしてヘルは少し微笑むと、両の手の平を突き出す様に俺に向ける。

「風葬。」

ゴオオオ！！！！

風が起こすと思えない音がする。

そして、その音と共に、俺とヘルの間にある空間に存在する物体が、その姿を無惨に変形させ、砕かれ、切り裂かれ、一つの例外も無くその原型を無くしていく。

「ヤバイ…」

足が動かない。それに動悸も激しい。

ただここで諦めたら、今までの約束やら誓いやら、想いが、心が意味を持たなくなる。

「、。」「！」

なら、本気で死ぬ気でやってやる！！

「、。、。、。」「！」

身体能力をギリギリまで高めて、あの風の魔法を正面から受け流す！！

「！」

行くぞ！！！！

バキバキバキバキビキビキビキビキゴキゴゴシャグチャグチャ  
パリパリバリベキゴキ！！！！！！！！！！

【ヘル視点】

「……」

風葬は直撃。威力も精度も完璧な一撃が、五膳麗二を飲み込んだ。

普通の人間なら原型を残さずに只の肉塊に成り下がる。

だけど、五膳麗二は違う。

普通の人間では持てない稀な技を持っている。

しかも魔王に認められた人間だ。

……だけど、私の切り札、風葬は属性魔法の最上級に位置する魔法。

例え上級悪魔でも、まともに食らえば命の保証はない。

ガラ……

………なのに、なんでだろう？

ガタ……

なんでこんなにも、

ミシ…

五膳麗二が無事だと、祈るように、そして自信を持って思えるの  
だろうか？

「…よお、ちゃんと見てたかよ。俺の勝ちだ。」

【麗二視点】

「…よお、ちゃんと見てたかよ。俺の勝ちだ。」

痛む体に鞭を打ち、立ち上がって真直ぐにヘルを見据えて言う。

「…」

何とか言えよ。

「確かに、私の負けですね。」

「  
…」

「約束通り、あなたを殺すのは止めます。」

「よっし！」

「それと、二度も負け、しかも記憶を失っている間の身の回りの世話までしてくれてありがとうございました。」

「あ、ああ…だけどあれは俺が原因だし…」

「理由とか原因はともかく、一応は御礼を言わないと気がすまない  
ので。」

「はあ…まあどういたしまして。」

「それでは、さようなら。」

「おい、帰るのか？」

「はい、私にはもう、ここにいる理由が無くなりましたから。」

「…そか、なんか娘が嫁ぐみたいに寂しいな。」

「嬉しいお言葉です。では…」

「エウエスホーン  
一角獣王！！！！」

ドガアアン！！！！

「「!？」」

突然、ヘルの前地面に何かが物凄い音をたてて落ちて来た。

てかあの声はメアか？

「ケホ、何のつもりですか？メアさん。」

「ゲホ、ゲホ…！」

本当に何のつもりだ。

「ケホ、ヘルちゃん！」

「？」

「帰るなんて嘘を言ってもお見通しです…！」

メア、何が言いたいんだ？

「ヘルちゃん達のような殺し屋は、仕事で失敗した時点でもうその人生は真っ暗です。」

？どう言う、意味だ？

「その後、奴隷として買われるか、貴族の愚か者の元で性の捌口として体を汚したり、解剖されたりする実験体とかにしかねないのは分かっているんですよ？」

「…そうですか。」

「なんでそんな事黙ってた？」

「…」

「ヘルちゃんは綺麗でスタイル抜群だから、多分貴族とかに買われると思う…」

何なんだよ、じゃあヘルは、それを覚悟して俺を見逃したのかよ？

自分を犠牲にしてまで？

「…」

「…」

「…」

許さねえ、そんな結末。俺が否定してやる。

才前ニナニガ出来ル？

うつせえ…ならお前も考えやがれ。

俺二頼ル力？所詮、偽物ノ発想ダナ。

黙れ。今はそんな嫌味はいらん。

ホウ…

俺をどんなに馬鹿にしても蔑んでもいい。だから、一緒に考えてくれ！！

…

頼む！！

……偽物ト言エド、少ナカラズアイツノ性格ヲ受け継イデイルヨ  
ウダナ、貴様ハ。

あいつ？

良イダロウ、良ク聞ケ…

！ああっ！！

…ト、コウ言エバイイ。

良し、分かった！

「…なあ、なんでわざわざそんな所へ帰らなければならなんだ？」

「私達は予め契約をしているんです。」

「契約？」

「はい。絶対に破る事の出来ない約束みたいなものです。」

「それで、どんな契約をしたんだ？」

「任務に失敗した場合、私達はその全てを、魔界に帰った時点で譲渡しなければなりません。」

「？すまん…もう少し分かりやすく頼む。」

「勿論、拒否は出来ません。」

無視かよ！

「…え〜とつまりだ。俺と一緒に行けば良いんだな？」

「「なんで!？」」

「なあ、全てを譲渡って、相手がどんな奴でも有効なのか？」

「え…あ、はい。」

「よし、俺も魔界とやらに行くぞ！」

「だからなんですか!？」

「!まさか…!？」

「え？メアさん分かったんですか!？教えて下さい!！」

「いや…言わないほうが面白いから言わない…ぷぷ…」

と意味に気付いたメアがかなりのニヤけ顔で言う。

「魔王様には私が謝っておくよ、勿論誤解がないように、です」

「ありがとな、メア」

と二人で半分笑みを浮かべ、もう半分はニヤけるといふスゴ技を使っていると、ヘルが申し訳なさそうに呼び掛けて来る。

「じゃあ、行くよ麗二」

「おうよ！」

メアが地面に魔方陣？みたいなを展開し、俺がヘルの腰を掴んで担ぐ。

「え？え？何を？する気なんですか？」

ヘルは無視つと。

「ヘル、あつちで待ち伏せしてる奴等はあるか？」

「…います。」

「よし、なら早く行くぞ！！」

ヘルの暗い顔をこれ以上見たくない為、メアを急かす。

「次元の柱、逝け！！」

「字がちっがーうっ！！！？？」



「よし！！契約完了おおおお！！！！そしてどっするっううう  
う！！！！！！？」

地面が、もうすぐそこまで来て…

「着地は任せて下さい。」

とヘルの声が聞こえた瞬間、体が急激に軽くなった。

「ヘル…！？」

そしてヘルを見て、少し驚いた。

「ちゃんと立って下さい。」

「ああ…てゆうかお前…」

翼が生えてないですかい？

「これが本当の姿です。」

「そすか。」

「それより、麗二さん？」

「ん？」

「どうして私の全てを寄越せと言ったんですか？」

「ああ、それか。どうせなら俺の物にして出来る限りヘルを自由に

したいと思つてな。」

「…そうですね。でも、周りを見た方が良いでしょう？」

「はい？」

とヘルに言われて周りを見回し、後悔した。

「おい、こいつ人間じゃねえか？」

「なんでこんな所に人間が？」

「食つちまうか？」

…うん、めっちゃ囲まれてるね。

「おい！その悪魔の女！」

悪魔達の間から、偉そうな服着た悪魔が出て来てヘルに言った。

「お前がヘルガ・ドルスターだな？」

「はい、そうですが？」

冷めた目で冷静に対応するヘル。

「オークションに着いて来い。」

偉そうな服着た悪魔がそう言ってヘルを連れて行こうとヘルの腕を掴もうとするが、ヘルが腕を叩き落とす。

「お断りします。」

とヘルが言った瞬間、空気が凍ったように皆が静止した。

「…お前は契約に逆らう気か？」

「いいえ、とんでもありません」

若干苛立ちを含んだ悪魔が問う。

が、ヘルはそれに反比例して笑顔で答える。

「言っている事とやっている事が矛盾しているぞ、このクソ女。」

「いいえ 矛盾なんてありませんよ？だって、既にこの人間に全てを譲渡しましたから」

ピキーーーーーン…

再び、空気が凍った。しかも今度は効果音付きで。

「私の全ては既にこの人間に譲渡されていますから、オークションに行く必要なんて無いんです、ハイ」

とてもハイテンションに喜々として語るヘルとは反対に、周りの悪魔達の反応は同じくらい冷めていた。

「…人間を殺せえええ！……！」

その言葉と共に、周りを囲んでいた悪魔達が襲いかかって来る。

「しっかりと掴まって下さい、麗二さん。」

とヘルに腕を掴まれたと気付いた瞬間には既に、ヘルは悪魔達から少し離れた所に立っていた。

「御主人様 命令を」

何故に御主人様！？ヘルに言われて嬉しいけども！！

「…適度にボコボコ？」

何故突っ込まない自分……！！！！

「はい 分かりました御主人様」

とヘルは軽く会釈をし、悪魔達に歩いて向かっていく。笑顔で。

「では 命令なのでいつきまーす」

ただいま、大変年齢制限のかかる描写がありますので飛ばします。

「すげ……」

ヘルって見た目以上に強いな。あの悪魔達が成す術も無くボコボコ……

「麗二さん。」

「ん？なんだ？」

「ありがとうございます。」

「気にしなくてもいい。俺が原因でこんな事になったんだしな。」

「ふふ…麗二さん」

「んーぐ！？」

唇が温かい。ヘル顔が近い。導かれる答は一つ！

「んっ…」

なんでディープのほうなんですかー！！！！

「ぷはあ…！ヘルいきなり何をしゃがる！！？」

「何って、御礼です。」

「いやいや、気にすんなって言ったよな！？」

「じゃあ、私がしたいからしたんです。って事にしておきますね。」

「あゝ…もういいや。疲れた…帰ろ…」

「そうですね。そろそろあっちに戻ったほうが良いですし。」

「で、どうやって戻るん？」

「私が魔法と一緒に帰りますから、手を握って離さないで下さいね。」

「おう。」

「次元の柱。」

短かつ！？てかうわっ！！？なんかさっきより強烈なんだけども！！？

「着きました。」

「ん…さんきゅ…うぶ…」

ヤベエ…冗談抜きにもどしそ。

「ところで御主人様。」

「なんだヘル？」

「また一緒に、住んでも宜しいですか？」

「当たり前だ。…うぶ…」

「ありがとうございます」

あ…メアが走って来る。てか、なん、かい…しき、が…うす、  
れ…て…き…た…

ドサッ!!

「御主人様!？」

「麗二!？」

二人が駆け寄る。

「…すぴー…」

「…」

寝てんのかい!？無駄な心配かけておいて!!!

と二人のツツコミが重なった瞬間でした。

おまけ

「むにゃ… 麗二い…私のう…初めて貰ってえ…」

外の騒ぎで一切起きなかった馬鹿姉でしたとき。

どんだけよ!?

不幸その二十六 彼女は記憶が戻りました。（後書き）

ども、こんばんわ、レイン氷花です。

最近は何故か自分を見失っているようにしか見えない文を書くな  
と思うこの頃。

何故かヘル編をおもいついてしまいました。

そのせいか一日を無駄にしました。

そして今日気付いたのですが、僕は主役キャラより脇役キャラのほ  
うが長く語れると思いました。

ヘル「普通の事じゃないのですか？」

多分ね。

相変わらずオチ無しで終わる後書き。

またね

不幸その二十七 彼女は箸が上手く使えません。（前書き）

ども！最近視力が落ちたな〜と思うレイン氷花です！

唐突だけど、うん。最近麗二の不幸が少ない気がしました。

でもでも安心してください！麗二の不幸はこれからが本番なので  
すから！

では本編をどうぞ

不幸その二十七 彼女は箸が上手く使えません。

「眠い…だるい…軋む…」

朝起きてからの感想がそれだ。うん。

何故こんな事を言うかというところ、至極当然の事だ。

昨日の、記憶の戻ったヘルとの人知を超えた戦い、空からの落下、術の反動による全身の筋肉痛…うん、普通の人は死んでるね。

「しかし、良く生きてるよ。ホント…」

…そういえば、ヘルに俺の術が効かなかったのはなんでだ？

コンコン

「麗二さん、起きてますか？」

ガチャと返事を聞かずに入ってきたヘルは、俺が起きてるのを確認して眉間に少し皺を寄せた。

なんで？

「麗二さん、起きてたんなら返事してくださいよ。」

いやいや、返事しようとしたら入って来た奴が何を言う。

「まあそんな事より、朝食が出来上がったので早めに降りて来てく  
ださいね。」

と言つて、部屋を出て行こうとするヘルを俺は呼び止める。

「なんです?」

「昨日、俺の術が効かなかったのはなんでだ?」

「ああ…それは簡単な事ですよ。」

「?ちつとも簡単じゃないと思うんだが…」

「一から説明したほうが良いですか?」

「頼む。」

だからその出来の悪い息子を見る母親の様な目で俺を見るな。

「麗二さんの術つてのは音で相手に作用してますよね?」

「そうだ。」

確かに、声…とゆうより音に近いからな、俺のは。

「で、私は風を自由自在に操れます。」

「そつみたいだな。」

昨日のあのなんか周りを砕いていく様は、ハリケーンより数倍上  
だと思っ程だしな。

「ところで麗二さん。音は真空中を伝わらないのはご存じですか？」

「ああ。」

「それですよ。私は風を使って自分の周りを真空の膜で覆って術を  
防いだんです。」

「なるほどー、そういう事が。」

「て…それ使われたら俺勝目無いじゃん…」

「ですねー」

「ですねー　って、そんな満面の笑みで言わないでくれよ…」

「では、私は先に下に行きますね。」

「ガチャ、ボタン…」

とヘルはドアを開けさつさと下におりていった。

「さてと…」

「いるんだろ？」

「…良く分力ッタナ…？」

違和感バリバリなんだよ。

ソウカ。…ソウイエバ、アイツモソウ言ッテイタナ…

アイツ？誰だそいつ？

フン…才前ガ知ッテモ意味ノ無イ事ダ。

なんか腹立つ言い方だな…

才前ト話シテイルト疲レル。無駄話ハコレクライニシテ、サッサト下ニ行ケ。

腹立つなこいつ…

「麗二さ〜ん！早く下りて来てくださーい！」

下からヘルが呼んでるのが聞こえる。

じゃ、行くか。

~~~~~

「おはよう麗二」

「おはようメア。」

「おはよ〜麗二ちゃ〜ん」

声に振り向いた先は見事なメロン…じゃなかった馬鹿姉の胸が視界いっぱい広がっていた。

ムギユ

ヤベ…息が…

「っへ！もげむぶあー！！！」

訳

「って！させるかあー！！！」

もっされてるけどそれはスルーでお願い。

ミシミシミシィ…

いつもの如く締め付ける。うん。不可抗力で胸がわーい　な状況だな、うん。

「痛！？朝から激し過ぎだよ麗二ちゃん！？これじゃ私壊れちゃ」

「もぶあい”ぶあべるぶぼーばー！！！”

訳

「誤解される事言っなー！！！」

因みにそれから五分くらいたってやっと馬鹿姉は離れてくれた。

「朝から無駄な体力使わせんなや…」

だが昨日の疲れがとれたのは不思議だ…心当たりはあるが。

「なに？麗二ちゃん　また私の胸に抱かれないの？」

と視線を感じた馬鹿姉が満面の笑みで聞いてくる。なんでこんなのは鋭いんだ…

「結構だ。」

て、あれ？俺より先に下りた筈のヘルがない？

「誰をお探しですか？」

「うわぁっ!？」

スウ…て感じに後ろから突然ヘルの声が聞こえた。その為にはかなり間抜けな声をあげたのは反省。

「なんですかその幽霊を見たような反応は？」

「いやいや、いきなり背後から声が聞こえたら驚くだろ。」

「では今度は横か前からしますね。」

「ああ、頼む…てなんか敬語って嫌だな。別に敬語を使わなくても良いんだぞ？」

なんか他人行儀みたいで嫌なんだよな。

「いえ、私は敬語以外喋った事があまり無いので…」

「そうかい。なら敬語でもいいや。」

「ありがとうございます。」

「いやいや、そんな頭を下げなくても…」

「そうですか？では次からは善処します。」

「あ、ああ…」

敬語やっぱ喋りにきい！

「麗二、早く椅子に座って朝ご飯食べよ」

「そうだな。」

と返事を返して俺はヘルの横に座った。

「え？あのメアさんの隣に座らないんですか？」

「？どうしてだ？」

「どうしてって…麗二さんはメアさんと座ったほうが宜しいんじゃないんでしょうか？」

「？ヘルの世話を見なきゃいけないのに？」

「え？」

「あ…そうか。ヘルは記憶が戻ったから、手助け要らないんだっ  
な。」

「そうですよ。」

「て事はだ。食事は勿論、入浴や着替え、トイレの世話にその他諸  
々の手助けは要らないて事だな。」

「…」

「？どうしたんだ？…ヘル？大丈夫か？」

何故いきなり無言になる？それに心なしか顔がトマトのように赤

く…

「あちゃ…これじゃ後数十分はこのままね。」

馬鹿姉がヘルのおでこに手を当てながら言う。

「…仕方ないか、私達は先に食べちゃいましょう」

「良いのか？ヘルこのままで。」

「大丈夫よ、自然に元に戻るから。」

「そうか…」

「では、いただきますーす」

「いただきーす」

「いただきーす。」

~~~~~

因みに、それから約三十分くらいたってやっとヘルが正気を取り戻した。

その頃には俺達はもう食べ終わってたけどな。勿論ヘルの分は残して、だ。

更に備考。ヘルは箸を上手く使えないみたいだ。

んで結局、スプーンで食べさせるのもなんか食べずらそうなので、俺がアーンして食べさせたんだが、何故か終始顔が若干赤かった。

ヘルの頬に赤みがさした照れたような恥ずかしがっている表情は、なんかかなりキタ。なんかこう…ゴメン言葉に出来ん。

不幸その二十七 彼女は箸が上手く使えません。（後書き）

ヘル「作者の駄文を読んで下さってありがとうございます」

ちなみに、まだ人気投票が続いています。投票お待ちしてます

ではさよなら～

不幸その二十八 彼女は意外にも可愛いものが大好きです。（前書き）

ども！最近思考が変態化してきたレイン氷花です！

冬休みなのに更新が中々出来なくてすみません！

でも更新スピードを上げようと努力はしますんで、応援宜しくお願いします！

後何回も言っちゃウザインですが、キャラ人気投票は未だに続いています。

ですから、遠慮なんかせずにバンバン投票してください！てゆうかお願いします！

では、いい加減作者のテンションがウザくなってきたので、本編をどぞ

不幸その二十八 彼女は意外にも可愛いものが大好きです。

「いつてきまーす！」

朝ちよいとごたごたしてたが、何とか無事学校行けるな。うん。

と久しぶりに家からの登校という事で、元気に挨拶をして玄関を抜けた先には、これはこれは久しぶりなメンツがいた。

「…」

「おはよう、麗二君。」

「久しぶりだな。というのは間違いか…おはよう、麗二。」

うん。誰が誰か分かりやすい挨拶をどうもありがとう、諸君！

「じゃ、行くか！」

ボタンー！

「待つてー！？私を置いてかないでよ麗二ー！！」

突然、玄関の扉が開いてメアが出てきた。しかも制服着て…

ゴキッ…！！

「ふぐはあ！！？」

そして何故か物凄い勢いを殺さずに俺に抱き着くメア。そのせいで首が不吉な音を鳴らしたのは無視する。

「だが痛てえ…てかレアどうして制服着てる…？」

「え？麗二は私が学校通ってるの知らなかったっけ？」

は？……………ああ…そっぴや萌がそう言ってた気がする…てか忘れてたよこんちくしょー。

「しかも似合ってるし。」

外見は中学生なんだが、何故か我が校指定の制服がかなり似合ってる。

「そんな事言ったら照れるじゃない、麗二」

朝からテンション高いな、メア。てか違和感バリバリなのは何故？

「ん？」

複数の視線を感じて、視線の方を向く。

「…ラブ」

「あはは…まるで夫婦みたいだね、麗二君。」

「朝から惚気るとは…やるな。」

三人がそれぞれに意見を述べる。…琥春よ、前の二つは大体分かるが、お前のは意味が分からない。

「麗二君。もう出発しないと遅刻するから、行かない？」

「あ…じゃあ行くか。」

「メアとイチヤイチヤしたいのであれば、私達は空気を読んで先に行くが？」

「結構だ。メア、行くぞ。」

琥春よ、それは読まないで良いから。

「うん。」

そして、來桜、美花、琥春、メアと一緒に学校へと歩きだした。

~~~~~

そして、学校に近い通学路にて。

「…なあ…」

「なんだ？」

「いや、なんだじゃなくてよ。琥春は感じないのか？」

「さつきからある周りからの視線の事か？」

「気付いてるじゃねえか。」

「当たり前だ。こんなにもあからさまに視線を投げかけられているんだ。気付かない方がおかしい。」

「ですよー」 でも俺は何故か殺意や憎悪の視線を感じるんだよねー、約八割野郎どもから。てか二割の女生徒達が俺にそんな視線を向ける意味が分かんねー

「それは多分、黒川さんのせいだと思うよ。」

「？何でだ？美花。」

女生徒から受ける視線の原因が何故琥春？

「黒川さんて……その……モテるんだ。」

「確かに、あの眼光さえ無ければかなりの美少女だからな。」

俺ん中ではベスト5に入るし。…因みに、ロメアは勿論一位だ。

「違って、黒川さんは特に女の子にモテるんだよ。」

……はいいい！？

「琥春。お前ってガチ百合だったのか？」

前を歩いていた琥春が振り向く。

「私にそっちの趣味は無い。……というか麗二…貴様、面と向かって私に問うとは意外に肝がすわっているな。」

百合属性は無いのか……まあ、現実にはそうあるもんじゃないし。当たり前か。

「そんなんより、俺はお前が何故女の子に特にモテているか聞いた。い。」

「きっかけは不良に絡まれていた可愛い女生徒を助けた事だった。」

「ふん…ありがちなパターンだな。」

「……………あれ？わざわざ”可愛い”女生徒ってつける必要あるのか？」

「そしたら、その事が次の日には既に学校中に知れ渡っているな。朝教室に着くやいなや、助けた女生徒と他可愛い女生徒達が私にお礼を言っただけなんだ。私は別にいいと何度も言っただけが、女生徒達は絶対に納得しなくてな。だからここは折れて、言ってしまったんだ。」

「へえー、なんて言っちゃったんだ？」

「気がすむまで私にお礼でも何でもすればいい。とな…」

「？それだけ？」

「ああ…だがそれが私自身間違いだと気付いたのは、そう言っ  
てしまった日の翌日だった。」

なんか、この先の展開が大体分かるぞ…

「翌日、学校の門をくぐると同時に、助けた女生徒と他の女生徒達  
が出迎えてきたんだ。」

わー…

「しかも、その女生徒の集団は私を一日中付け回し、昼休みの時間  
は私を囲んで弁当を食べるといった事をしてきたんだ。」

「……なんか、ハーレムを実現させた貴女が神に見えるよ。」

「馬鹿を言うな。実際にその立場になって考えてもみる…絶対ハー  
レムが嬉しいとは言えなくなるぞ。」

…なんか、その口振りだと…

「何かそれ、前々から女の子に囲まれたい。と思っただ様に聞こえ  
るんだが？」

ギク！！

琥春の顔が強張る。

え？何今の反応…

「もしかして本当はそっちの趣味が…」

「違う！！私はただ、可愛い女の子に囲まれないと前から思ってた……だけ………」

……ボロ出したな。

「べ、別にそんな趣味があるんじゃないからね！？勘違いしないでよねっ！！？」

……何故にツンデレ？

「焦りすぎだぞ……琥春。」

「い、いや……私はただ、可愛い物が好きただけだ………あ……」

凜とした容姿に似合わず随分女の子らしい趣味してんだな……てか、そのギャップが良いかもしれん。

「……許容範囲」

と來桜の助け船。

「來桜……ありがとう。」

若干涙目の琥春が、來桜にお礼を言う。

「……誰にでも、人には言えない嗜好、趣味がある……勿論、私も」

だがその一言でまた琥春は落ち込んでしまった。

…來桜よ、それ言っちゃダメだよ。

「！…つと…無駄話してる間にいつの間にか学校の前まで来てたのか…」

なんか皆で登校しただけでかなり時間が経ってるって錯覚してしまっな…

ていうか今日の琥春はキャラ壊れすぎだろ…

「思春期なんだよ、麗二。」

メア、お前もなんかキャラ壊れてねえ？

「思春期だよ」

……………なんか、疲れた…

と思う登校中でした。



不幸その二十八 彼女は意外にも可愛いものが大好きです。(後書き)

今回の出来はどうでしたか？楽しめましたか？

出来れば感想を述べて下さい それを参考に、作者はこの小説を良  
くしていく気ですから

ロメア「これからも、私と麗二の淫らな愛の物語を宜しくね」

麗二「誤解される様な言い方するな!!」

またね

不幸その二十九 彼女達は意外にもチームワークが良いです。(前書き)

それでは本編どうぞ

不幸その二十九 彼女達は意外にもチームワークが良いです。

「…で、なんで俺の右隣がメアで、反対に來桜、前に琥春で、來桜の前が美花なんだ？」

と冒頭から、陰謀の匂いを感じる席順を見ながらツツコンでみた俺。

「なんでも、同じグループの人と近い席にしたほうがチームワークが良くなるから、ていう理由らしいよ？」

「そうなんだ…」

何気に萌ちゃん考えてんなあ…

「ところで麗二ー!!」

「なんだ？てかいきなり大声で呼ぶなメア。」

今のでクラスの皆がこつち向いたんですけども!?

「これからは昼も一緒にいられるね」

ギロ…!!

…なんか視線が殺意に変わったんだが…主に男子の。……てか…

「お前、それ言ったら駄目だろ……」

今の一言で一緒に住んでる事バレたな……ほら、こんなにも殺意の視線が俺に集中……

バゴオオン……！！

「おはよう！諸君……！！」

突然の破壊音と共に、このクラスの担任にして喧嘩好きの萌ちやんが元気良く入って来た。

……てか扉壊すなよ……

「早速だが出席を取るぞ……！まず先に来桜……！」

「……」

「よし、全員いるな……！」

いやいやいやいや、今のはなんだよこの税金泥棒。はしよりすぎだろ絶対！しかも来桜返事してなかったじゃん……！ていうか何故に来桜を選ぶ……？

「あー、麗二いたのか。」

いたよ。てかそのセリフはちゃんと出席を取った奴が言え。

「……ムカついたので麗二だけに自己紹介をさせま……す。オラさっさと前に出ろ。」

職権乱用だろそれ！？てかイジメだ！！

「来なければ退学。」

「あんたホントに教師か！？」

あ…思わず声に出してツツコンでしまった…

「てめえ…さつさと前来いや。でないと、お前がイジメられるよう仕向けるぞ。」

…もうあんた先生じゃないだろ…

と思いながらも、俺は渋々前へと歩いていく。

「で、どうしりゃいいんだ？」

「しろ、自己紹介。」

やっぱりしなきゃならんのかい…

「五膳麗二。以上！」

これ以上無いくらいの簡単な自己紹介をした。

「…因みに、現在美女一人、美少女二人と同居中。しかも美少女の許婚が一人いる。」

「萌ちゃん！！？」

何言ってんだあんたは！？つかバラすな！！！！

ギロ……！！！！

「！？」

ヤバイ……野郎共の視線が鋭く……勿論美花以外の。

「もう席に戻っていいぞ、麗二。」

「あんたは鬼か、鬼畜か？」

「教師だ。」

「認めねえ……！てか認めたくねー！！」

「いいから早く席戻れ。」

……もう、いや……

かなり肩を落として、俺は一番後ろの自分の席へのっそりと戻っていく。……途中の男子からの殺気は冷や汗もんだった。うん。

「災難だったな、麗二。」

「そうだな……」

席に着くのと同時、前の席に座っている琥春が上半身だけを捻り、慰めるように言う。

「んじゃ、俺は職員会議に顔出してくつから、後は好きなようにしろ。」

と言つて、萌ちゃん。又は教師失格な萌ちゃんが教室から荒々しく出ていく。そしてそれと同時に増幅される殺気、又は殺意。似た様な物か。が俺一人に集中される。

「麗二。来るぞ。」

依然、俺の方に顔を向けていた琥春が研ぎ澄ましたかの様な声で言う。

てか分かるよ。こっちに向かってくるこいつらを見ればな。（野郎共）

「みんな。耳塞いどけ。」

來桜達だけに聞こえるよう命令し、全員が耳を塞いだのを見計らつて俺はクラス全体に響く程の声で、言った。

「ムム。」

これを聞いた、耳を塞いだ俺達メンバー以外のクラスメート達は、突然系が切れたマリオネットの様に倒れていく。

「やはり凄いな。君の使う技は。」

感嘆するかのように、倒れてゆくクラスメートを見ながら琥春が呟く。

「てか女子まで眠らしてしまった…どうしよう…」

これじゃこのクラスは閉鎖学級みたいじゃん。

「ねえ、麗二君。皆が起きるのって大体どれくらい？」

とここで、周りを見ながら驚いている様子の清水が唐突に聞いている。

「何もしなけりや明日の夜まで起きないと思うぞ。」

…まあ、失敗したら一生起きないんだがな。俺に失敗なんてあるわけないから平然と使っただけぞ。

「…授業」

「？ああ…そうだなあ……しょうがない。」

来桜が席を立て、いつの間にか俺の横に来ていたのかは気にしないでおこう。

「皆でサボるか」

皆二つ返事で肯定の意思を示した。

…予想外。

「んじゃどっか行こう！」

ガラッ…

「な、なんだこれは!？」

突然、かなり悪いタイミングで次の授業を受け持つ教師が入って来た。そして教室の異常に声を上げた後に俺達を見つけた。

「何が起こった!？包み隠さず」

「…みんな、耳…」

「」「」「」

皆に小さく呼び掛け、四人は黙って耳を塞ぐ。…うん、良いチー  
ムワークだ。

「」

教師が倒れた。

「んじゃ、気を取り直して行きますか!」

楽しみの始まりだ!!

不幸その二十九 彼女達は意外にもチームワークが良いです。(後書き)

涼「ククク、ではまたの機会にお会いしようか…ククク…」

不幸その三十 彼女はとんでもないお嬢様です。

「…楽しみ」

と來桜。

「僕達こんなふう遊ぶの初めてだしね」

「私もだ。」

「私も」

んで、上から美花、琥春、メア。

「確かにこんな人数で遊びに行くなんて初めてだな。」

中学校時代は友達0人という悲惨な学校生活を送ってたからなあ…べ、別に寂しくなんてないんだからねっ！？勘違いしないでよねっ！？……と一人脳内で虫酸が走る事を考えている俺は現在、清水達と楽しくショッピングモールに来ている。

「…で、最初は何処に行くかが肝心なんだが…」

前方にある人込みを見る。

「てめっ！この糞餓鬼！！俺様に向かって今何つつた！？ああ！？」

「ダサメタボって言ったのよ！！この全身猥褻物！！」

「！？ぶつ殺すっ！！！」

…例によって例の如く、どう見ても人相の悪いメタボ中年が、黒いゴスロリ衣装に身を包んだ小学生くらいの美少女、美幼女？に絡んでいた。

「…こりゃ助けないといけない展開みたいだな、琥春。」

と琥春に向かってそう言うが、振り向いた先には既に琥春の姿は無かった。

「ぐげはあっ！！？」

突然、さっきのダサメタボの悲鳴？が聞こえてくる。

「！何が……な！？」

俺はその悲鳴？が聞こえた瞬間、ダサメタボがいた場所を反射的に向く。そして衝撃的だ映像を目に映してしまった。

「大の大人が…少女を襲うとは愚か者にも程がある…！」

拳を握り締めたままの琥春が、怒り心頭とばかりに怒気をあらわにする。

「…うわ、琥春あんなに強かったのかよ。」

「まだまだ黒川さんは本気じゃないみたいけどね。」

俺の驚愕と呆れが入り交じった言葉に、清水が軽く新事実を載せながら返す。

「マジかよ……」

つかあの格好からして、たった一撃であんな重量ある奴を殴り飛ばしたんか……

「…琥春は怒らせない様にしような……」

「…うん。神に誓うよ……」

と男二人が二人で固く誓いを立てている時、琥春達はというと。

「君は大丈夫か？（可愛い……）」

と琥春が内心のドキドキを隠してクールに言う。

「大丈夫よ。それよりも貴女強いよね。尊敬するわ。」

さっきので恐怖を全く感じていないのか、少女もとい美少女は凜とした声で琥春と会話をする。

「尊敬とは……そこまでの事をしたつもりは無いのだが？」

「したじゃない。公衆の面前で絡まれている少女を助ける事を。」

「あれは体が勝手に動いたまでだ。」

「それでもその勇氣は、尊敬する対象として相應しい。」

「あ、ああ……」

少女の子供らしからぬ言葉に、琥春は少し怯む。

「危ない!!」

メアが突然慌てた様に叫ぶが、琥春は咄嗟の事で反応出来ない。

「糞餓鬼供がああ!!死ねえええ!!!!」

鼻から鮮血を垂れ流すこの世のゴミ事ダサメタボが、どこから出したのか切れ味良さげなナイフを振り下ろしながら叫ぶ。

「。。。」

「かつ……!!?」

ダサメタボが突然、静止したまま膝をつく。

「。。。」

「ぐぎゃああ!??」

今度はナイフを落とし、そのまま前のめりに倒れる。

「油断したら駄目だろ、琥春。」

「!麗二、お前か?」

人込みを無理に掻き分け入って来た俺に、琥春は驚愕の表情のまま聞く。

「俺しかいないだろ？こんな事出来るのは…」

そう言つて、土下座に近い体勢をしているダサメタボを指す。

「そうだが…良いのか？こんな人込みの中で使つて。」

「当たり前だ。友達を助けるのになりふり構つてられつてか？」

…まあ、実際は周りの奴等立つたまま気絶してるんだけどね？

「…そうだな。」

「おう。」

「…だが、そう言いつつも周りの奴等を気絶させている奴が言つと説得力皆無だがな。」

「はは、バレてたか。」

てか何でバレたんだろうか。一応琥春達に気付かれない程小声で呟いた筈なんだが…

「ねえ。」

思考に没頭していた俺の目の前に、さっき琥春が助けた漆黒のゴスロリ少女…幼女？が来て、俺を呼ぶ。

「…ん？どした？」

「あなたが使ったアレ、何？」

思考の海から帰って来た俺に対して、ゴスロリ美少女は何とも答えにくい質問をしてきた。

「俺、魔法使いだから。」

「冗談はいい。それよりもアレを説明して？」

俺のボケをこうも躊躇う事なくバツサリ一刀両断出来るとは…この少女、只者ではないな。

「……………えと、秘密って事で勘弁を？」

「そう。ならいいわ。」

あら、あっさりと……………大人だな。

「それよりも名前を覚えてくれないかしら？…あなたも、そしてあそこにいる人達も。」

とゴスロリ少女が、かなり年不相応な感じに言う。

…てか、アレ？どうして清水達もこっちのツレって分かったんだろ？

「五膳 麗二。」

「黒川 琥春だ。」

「メアです 宜しくね？」

「僕は清水 美花です。」

「……姫川 來桜……」

と個人それぞれ個性豊かな自己紹介を繰り広げた俺達に対して、ゴスロリ少女は顎に手を添えて考える素振りをしている。

「……ふむ、覚えたわ。」

凄いな。てか俺より記憶力良くなえ？

「私は刹那。不良から助けてくれてありがとうね。」

と自分を指差してゴスロリ少女……刹那は、丁寧にお辞儀をする。

「……といっても、私一人でこんな雑魚殺れるんだけどね。」

「そんな冗談は良いとして、どうして絡まれていたんだ？」

「……嘘ではないんだけどね。でもいいわ。答えたげる。」

そう言つて、刹那はダサメタボの所まで歩いていく。

「答えは簡単。私を連れ去ろうとしてたのよ、こいつは。」

と刹那は一瞬下を向くが、すぐに顔を元の高さまで上げ、告げる。

「『クロキリ黒霧』社長の一人娘である、黒霧 刹那、事私をね？」

「「「!!!!!!」」」

「……！」

「……あれ？コレ、驚くところ？」

琥春、清水、俺の三人は驚愕に顔を引きつらせ、來桜は少しだけ驚きを表す。

てかメアよ、そこは空気読んでくれ……

不幸その三十 彼女はとんでもないお嬢様です。  
(後書き)

刹那「覚えときなさい！私は永遠の主人公よ！！」

五年後の刹那「俺にその気は無いんだがな。」

麗二「あれ？一人称が…」

不幸その三十一 彼女は強いです。(前書き)

大変永らくお待ちして申し訳ありません。

by レイン氷花

不幸その三十一 彼女は強いです。

「へえ…ここがゲーセンかぁ」

と、冷静な声とは裏腹に、おもつきし目を輝かせているゴスロリ少女こと、黒霧 刹那はソワソワとしながら俺に言う。

現在、黒霧刹那と俺ら御一行はゲーセンに来ている。何故ゲーセンなのかというと。

「…行った事ない」

と來桜。

「私もだ。」

と琥春。

「僕も行った事ないよ。」

と清水。

「私も」

メアは当然か…

「私はあまり外出させてもらえないから行けなくて。」

で最後に刹那と来たからゲーセンに行く事にした。まあ、俺も行きたい所が特に無いから快く賛成したんだが。

「で、最初に何がしたい？」

とりあえず店内に入って後ろに続く皆に聞く。

「…まかせる」

「私も勝手が分からないからお前に任せる。」

「僕も。」

「おまかせ」

「私も任せるわ。」

…任せる、って…一番困る返答だぜえい？ちみ達。

「……じゃあここはアレからだな。」

とりあえずここで立ち往生もなんだからと、仕方なく最初にやる奴考えて皆を誘導する。

「…これは？」

来桜がそのゲームの前で俺を見ながら聞く。…てかホントに知らないの！？

「それはゲーセンとかに良くある…お前達は知らないんだっとな。そのゲームは簡単に言っと、その付いてる銃で画面に映るゾンビ達を撃ち殺していくゲームだ。」

「なるほどな…」

「琥春やるか？」

「やる。」

付いてる銃を持ちながら、画面を興味深そうに見つめる琥春に聞く。て即答か…

「他にやりたい奴？」

「…嫌」

「僕もそうゆうの苦手だからパス…」

「私はいいや。」

「私は一度見てからやる。」

「…そうかい。」

「じゃあ俺と琥春で一回やってみせるよ。」

とりあえずもう一方の銃を手取る。

「て、重！！異常に重いんですけどコレ！？」

なんだコレ！？？てかなんでこんなに重いん！？絶対小学生無理だよなこのゲーム！！」

「む？それ程に重いのかこれは？」

そう言いながら銃を軽く動かす琥春。なんつつ腕してんだよ…

「もういいです…」

100円を二人分入れる。

「別に私の分は自分で出す。」

それを見た琥春が財布から100円を取り出してこちらに差し出して来る。

「いらない。ここは黙って100円得しとけ。」

「そつか…ありがと。」

「じゃ、早速やるぞ！」

オープニングっぽい物が画面に流れる。…めっちゃリアルッスネ…

「銃にもケーブルらしき物が無いのか…」

なんつつか本格的だな…

「始まるみたいだぞ。」

「お、おう。」

とりあえず重たい銃モドキを画面に向かって構える。

「出たな。」

画面に出てきたかなりリアルに作られたゾンビ達に標準を固定。  
引き金を引く。

パン！

え。

何、今の銃声？本物？いやいや、ありえんだろ。

「また来たぞ。」

琥春がまたリアルゾンビが来た事を知らせる。

ああもう！ヤケだ！！

パン！パン！

二体のリアルゾンビが頭を打たれて絶命した。てか流れる血まで  
本物みてえにリアルうっつ！！？

「次はドラゴンか……」

琥春が画面を見ながら呟く。

「ドラゴン！？しかも何かたくさんいるんですけど……！」

「繁殖期なんだろう？」

琥春よ、繁殖期で……他に言い方あるだろう？

「私もそろそろ参加するぞ。」

そう言つて、琥春も銃を構える。

「よし、じゃあ二人でさっさとこいつら倒してクリアだ！」

重い銃を担ぐ様に持ち上げ、素早く狙いを定めて引き金を引いた。

「負けた……」

それはもう完敗。

圧倒的な敵の軍勢に成すすべなくゲームオーバーした俺は、隣の琥春を一瞥する。

ドッドドドドン！！！！

……………スゲー。

何なのこの上手さ。

これが素人って言えるレヴェルですかい？

ドン！！

「……………殲滅完了。」

最後の、もう魔王っぽい威風堂々とした化物の眉間にこれでもか  
つてぐらいに鉛弾を打ち込んだ琥春が静かに呟く。

…………ゲームの魔王はあんなにも堂々としていて凄いいんだが、本物  
はアレだからなあ……………威厳も何もありませんぜありや。……………でも可  
愛いから許す。

「麗二。これはクリアしたとみなしていいんだな？」

画面に流れるエンディングから目を離さずに、琥春が聞いてくる。

「ああ。それが終わりって意味だ。」

「そうか。」

「じゃあお前ら、次やりたい奴いるか？」

後ろを振り向き、美花、來桜、メア、刹那に聞く。

「僕はいいよ。」

「……やらない」

「私も」

「私は……やっぱり止めとく。」

……結局貴様等やらんのかい!!

「じゃあ、次行くぞー!」

内心の怒りをとりあえずゴミ箱に捨て、皆の先頭を歩く。

「次は……なんか正式な名前は分かんないカーチェイスの奴、やりたいものー?」

「やる。」

刹那が前に出る。

「他の奴は……」

「私はいい。」

「僕も。」

「いい」

「私はー、やっぱいいや。」

「んじゃ決まりだな。」

じゃあ行くぞ！

「勝ちを渡さん。」

刹那が小柄な身体をシートに収めながら、威風堂々と宣言する。

「それはこっちのセリフだあああ！」

後になって思う。

俺、なに小学生に本気出してんの、と……

不幸その三十一 彼女は強いです。(後書き)

刹那「全ての物語は……」

五年後の刹那「俺に集まり、」

刹那「私に終わる。」

麗二「俺を抜いて勝手にやらないでくれないか!？」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5241d/>

---

魔王はDM！？

2010年10月12日15時29分発行